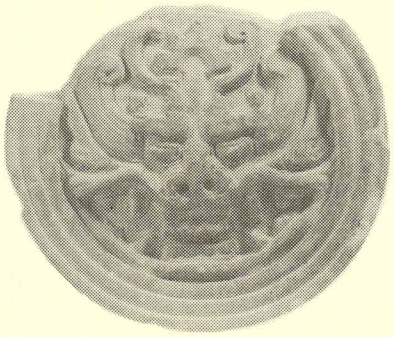
飛鳥・藤原宮発掘調査概報 10

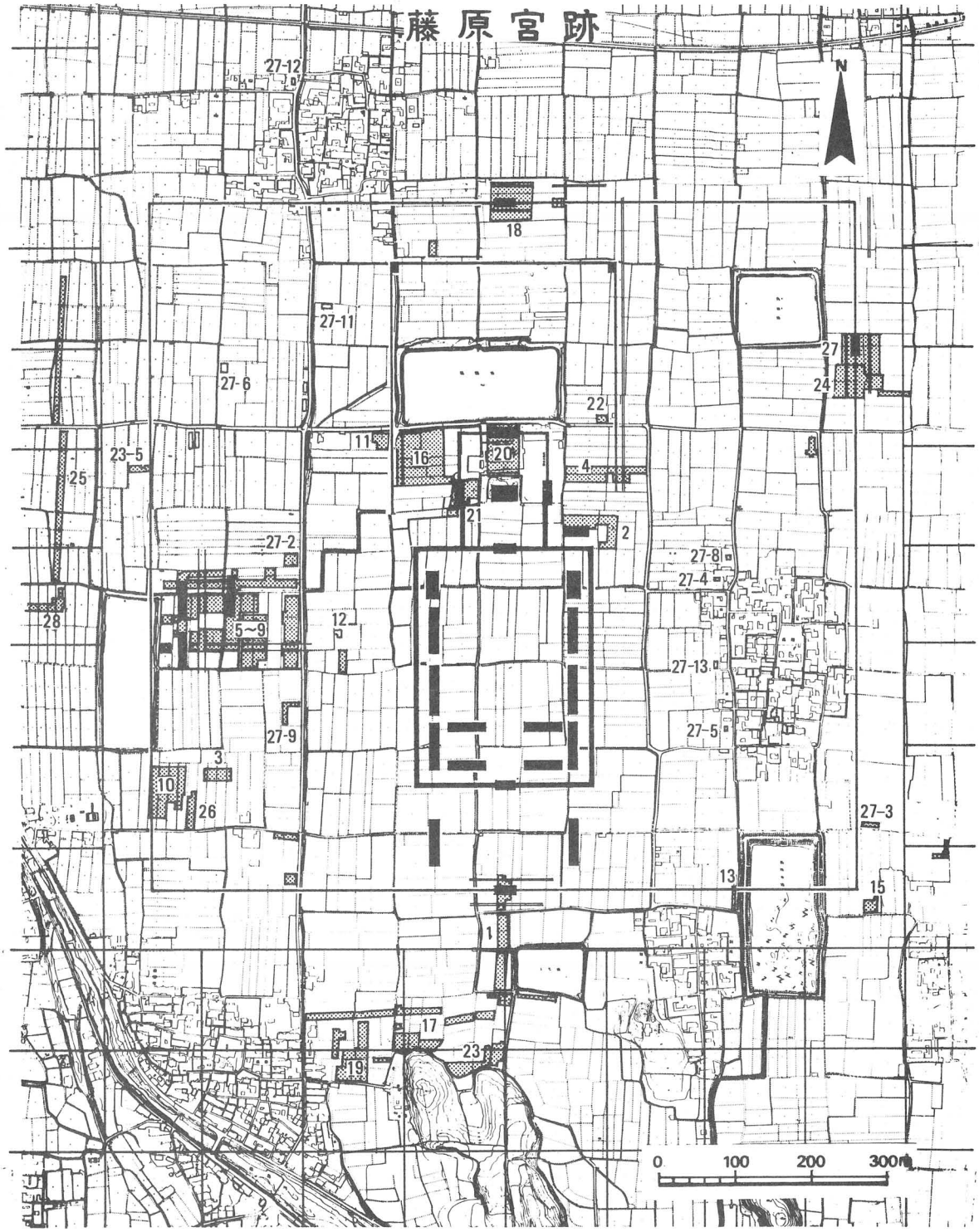


昭和 55 年 4 月

奈良国立文化財研究所

飛鳥・藤原宮発掘調査概報10　正 誤 表

頁	行	誤	正
2	28次の項	～ 54.3.31	～ 55.3.31
3	飛鳥寺東南部の項	74 － 4	74 － 1
12	上から2行目	SD175	SA175
14	上から17行目	西で南に偏している	北で東に偏している
16	上から4行目	当すると	討すると
16	上から14行目	年記のある	年紀のある
21	遺構図のスケール	5	5 m
28	下から5行目	SD2680	SD2686
38	下から6行目	二釉	二彩
46	上から15行目	軒丸は	軒瓦は
47	上から15行目	大官大寺災上	大官大寺炎上
59	一覧表の下の説明	期は	Ⅰ期は


藤原宮跡
N
27-12
18
27-11
27-6
27
24
22
23-5
11
16
20
4
25
21
2
27-2
27-8
27-4
28
5~9
12
27-13
27-9
27-5
3
10
26
27-3
13
15
1
17
23
19
0
100
200
300m

網：調査地　　数字：調査次数

飛鳥・藤原宮発掘調査概報 10

目　　次

藤原宮第25次の調査 …… 4
藤原宮第27次（東面北門）の調査 ……10
藤原宮第23－５次の調査 ……18
藤原宮第27－１次の調査 ……20
藤原宮第27－２次の調査 ……22
藤原宮第27－３次の調査 ……24
藤原宮第27－６次の調査 ……25
藤原宮第27－７次の調査 ……27
藤原宮第27－14次の調査 ……29
山田寺第３次（講堂・北面回廊）の調査 ……30
大官大寺第６次（講堂・東面回廊）の調査 ……41
桧隈寺第１次（南門）の調査 ……49
小山池の調査 ……54
田中宮の調査 ……56
奥山久米寺（Ａ地点・Ｂ地点）の調査 ……57
飛鳥寺東南部の調査 ……58
川原寺西南部の調査 ……60

発掘調査一覧表

※ 本概報に収録

遺跡・調査次数	調査地区	面積	調査期間	地籍・地番	所有者	備考
藤原宮 ※25	6AJK ～6AJJ	2,400㎡	54.1.10 ～54.5.10	橿原市縄手町	奈良県	国道165号バイパス
※27	6AJA－U 6AJB－P	2,200㎡	54.9.6 ～55.3.27	橿原市高殿町 上ワケ395～398 下ワケ441・442	堀井　宗雄 関本　淳子 中浦忠太郎 中尾　佐市 徳田　靖介 喜多　成和	東面北門
28	6AJL －A・H	2,700㎡	54.11.30 ～54.3.31	橿原市縄手町	奈良県	国道165号バイパス
※23－5	6AJK－C	130㎡	54.3.7 ～54.4.5	橿原市縄手町久保 195－1～4	青木安太郎	家屋新築
※27－1	6AWB－N	70㎡	54.4.12 ～54.4.18	橿原市高殿町519・520	吉田　脩	家屋新築
※2	6AJF－U	350㎡	54.4.13 ～54.5.19	橿原市縄手町ツクダ 315－3	森本　鶴雄	家屋新築
※3	6AJC－U	80㎡	54.4.27 ～54.5.7	橿原市高殿町鉢木97－3	福井三千枝	家屋新築
4	6AJF－F	2㎡	54.5.10	橿原市高殿町322－2	東　敏幸	家屋新築
5	6AJG－D	4㎡	54.5.10	橿原市高殿町149	松井　清師	家屋新築
※6	6AJF－P	180㎡	54.5.10 ～54.5.19	橿原市縄手町169－2	森本五十司	家屋新築
※7	6AWG －M・N	400㎡	54.5.23 ～54.6.7	橿原市南浦法然寺905他	橿原市	道路新設
8	6AJF－N	10㎡	54.5.29	橿原市高殿町318	平井　正輝	家屋新築
9	6AJG－S	300㎡	54.7.30 ～54.8.31	橿原市四分町286	鳥山　勇助	農業用倉庫
10	6AJA－L	125㎡	54.8.2 ～54.9.6	橿原市出合町字堀川 70－2	森本忠三郎	駐車場
11	6AJE－U	12㎡	54.11.28 ～54.11.29	橿原市醍醐町40－2	上田　正信	家屋増築
12	6AJP－U	20㎡	54.12.3 ～54.12.4	橿原市醍醐町153－4	西嶋　良信	農業用倉庫
13	6AJG－A	6㎡	54.12.6 ～54.12.7	橿原市高殿町 225, 226－1・2	森田　熊雄	家屋増築
※14	6AWC －R・U	110㎡	55.1.22 ～55.1.29	橿原市 膳夫町152－163 出合町255, 256	15名 氏名略	道路拡幅
15	6AMF－H	30㎡	55.1.31 ～55.2.6	明日香村小山135	藪内　俊夫	家屋改築

山田寺 ※3	5BYD	1,300㎡	54.5.11 ～54.9.14	桜井市山田	国	講堂 ・北面回廊
大官大寺 ※6	6BTK —M・N・O	1,200㎡	54.7.9 ～54.11.8	明日香村小山 東金焼56 講堂72－1，73 大龍59，953	上田　久吉 柚木　義幸 吉田　義弘 谷口　悦子 辰己　善昭	講堂 ・東面回廊
桧隈寺 ※1	6BHQ	790㎡	54.7.23 ～54.9.26	明日香村桧前 堂田595，596 入谷336－1	米田　楢一 上田　俊和 中村　正己	南門
※B	6BHQ	9㎡	54.9.17 ～54.9.19	明日香村桧前594－2	明日香村	公衆便所 新築
小山池 ※	6AMG —C・D	1,000㎡	54.8.20 ～54.9.21	明日香村小山451， 他16筆	米田　佐一 他16名	農地転用
田中宮 ※	5ATN—A	150㎡	54.10.2 ～54.10.11	橿原市田中町垣添 232，233	吉原　栄一	保育園新築
奥山久米寺 ※A	5BOQ—A	90㎡	54.4.21 ～54.5.4	明日香村奥山279	米田　三郎	家屋新築
※B	5BOQ—O	15㎡	54.9.25 ～54.10.2	明日香村奥山210－1	出口　信夫	家屋新築
飛鳥寺 ※ 東南部	5BAS—C	900㎡	54.1.9 ～54.4.13	明日香村飛鳥74－4	喜多　靖郎	家屋新築
A	5BAS—S	15㎡	54.12.17 ～54.12.18	明日香村字東山298	車井　正治	家屋新築
※ 川原寺 西南部	6BKH—B	499㎡	54.7.2 ～54.8.4 54.12.3 ～54.12.26	明日香村川原20－1	中井　高繁	家屋新築
A	6BKH—D	15㎡	54.10.22 ～54.10.24	明日香村川原890	中谷　光男	農業用納屋
水落遺跡	6AMD—V	20㎡	55.1.16 ～55.1.17	明日香村飛鳥288－1	島田　義雄	家屋新築
小墾田宮 推定地	6AMH—T	15㎡	55.2.5	明日香村豊浦1－4，2－1	吉田　直樹	家屋・納屋 改築

本文および遺構図に使っている座標は，すべて国土地理院第六座標系である。遺構図の座標値の表示には一符号を省略している。

表紙カット：大官大寺第6次調査出土・鬼面文軒丸瓦

藤原宮第25次の調査

（昭和54年1月～昭和54年5月）

この調査は藤原京内を通る国道165号線橿原バイパスの建設予定地内で工事に先立って実施したものである。調査地は西二坊大路の推定位置から西方約40 mにあたり，右京三条三坊から右京五条三坊にかけての南北にのびた約400 m，東西約6 mの地区である。本地区には三条大路・四条条間小路・四条大路の存在が予想され，調査の主要目的はそれら大路・小路の検出にあった。

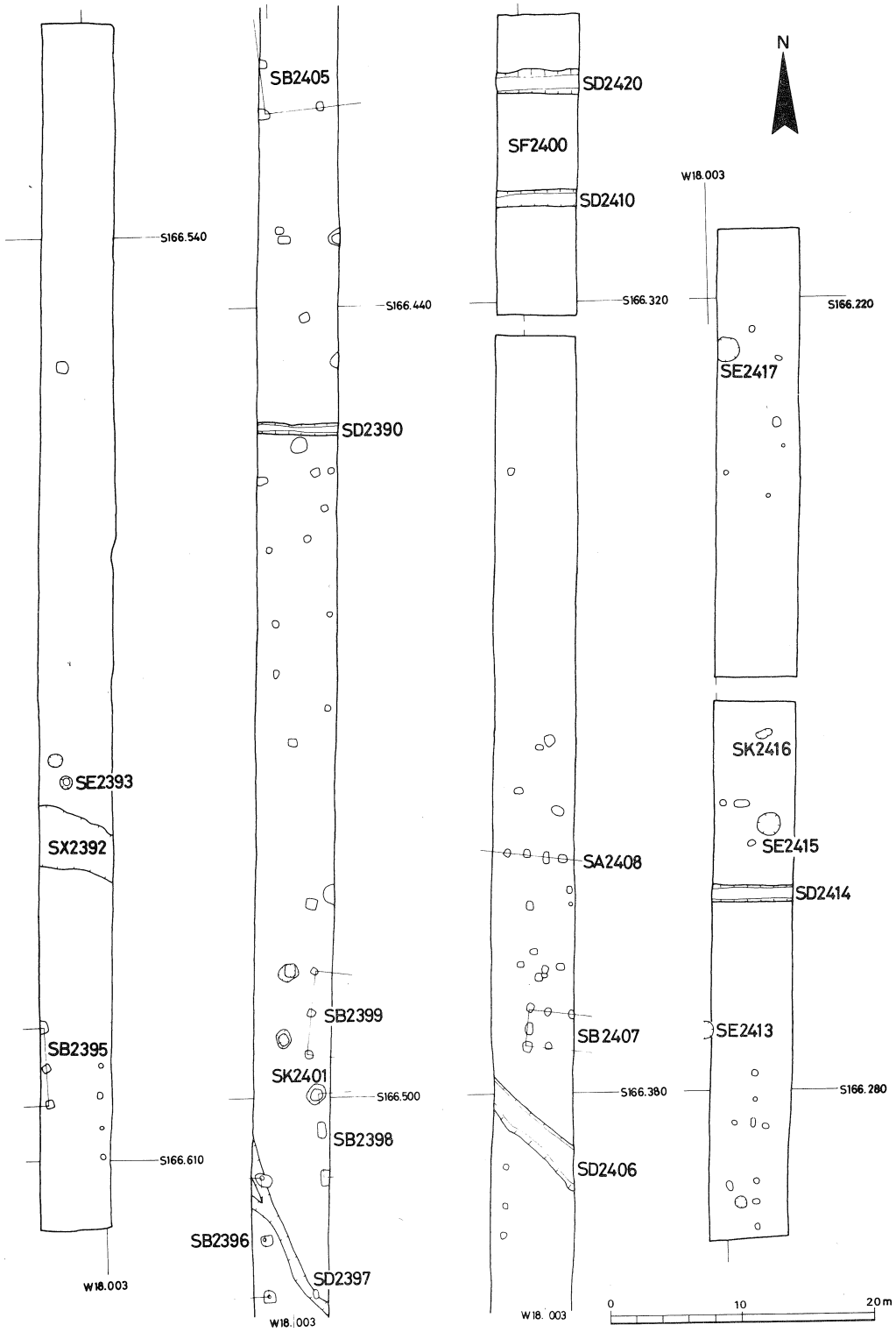
調査の結果，検出した遺構は藤原宮期・藤原宮期に前後する時期のものにわけられる。藤原宮期の遺構には三条大路および南北両側溝・四条条間小路南側溝・井戸4・溝2・掘立柱建物6・掘立柱塀2のほか土坑・柱穴などがある。藤原宮期以後の遺構には掘立柱建物1・井戸2・溝などがある。以下，時期別に主な遺構について述べる。

藤原宮期の遺構　ＳＦ2400は三条大路，ＳＤ2410はその南側溝，ＳＤ2420は北側溝である。ＳＤ2410は溝幅約1.2 m，深さ0.3 m，ＳＤ2420は溝幅約1.7 m，深さ0.4 mであり，両溝ともに素掘りの溝である。埋土からは藤原宮期の土器が出土している。両側溝の心々距離は9.0 m，三条大路の路面幅は約7.5 mである。

ＳＤ2390は四条条間小路の南側溝である。溝幅約1 m，深さ0.2 m前後の素掘りの溝である。藤原宮期の土器を出土している。

四条条間小路ＳＦ1731についてはその北側溝が検出できなかったので道路の幅員は明らかではない。また，四条大路および南北両側溝についても道路の推定位置が後世に河川の流路となったために検出できなかった。

ＳＥ2413は三条大路の北方にある井戸である。検出したのは井戸枠を抜取った円形の穴の一部で大部分は調査地区外にあり，西壁の土層によってそのおおよその形を知ることができた。上部径約1 m，深さ1 mである。藤原宮期の土器が出土している。ＳＥ2415はＳＥ2413の北にある井戸で，径1.7 mの井戸枠



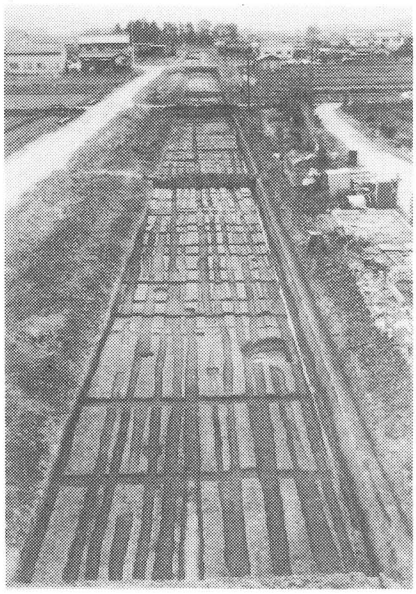
藤原宮第25次調査遺構配置図（1：500）

抜取りの円形の穴である。深さ1.7m，底部径0.8mである。藤原宮期の土器，瓦などが出土している。SE2417は調査区北端近くにある井戸で，径1.75mの井戸枠抜取りの円形の穴をもつ。深さ2.3m，底部径0.6mである。内部からは須恵器の完形品2点を含む藤原宮期の土器・瓦・塼などが出土している。

SD2414は三条大路の北方に位置する素掘りの東西溝である。溝幅1.3m，深さ0.25mで，底面はほぼ平坦である。溝の断面形は逆台形を呈し，藤原宮期の土器が出土している。この溝と三条大路との心々距離は42.6mであり，三条大路と三条条間小路の距離（1町＝450尺）の$\frac{1}{3}$にきわめて近い値となる。

SK2416はSD2414の北方にある土坑で，長径1.3m，短径0.6mの東西に長い楕円形を呈す。深さ0.6mであるが，底面東側に深さ0.2mほどのピット状のくぼみをもつ。7世紀後半の土器が出土している。

掘立柱建物は6棟を確認している。ほとんどが一部を検出したにすぎず，遺物も出土していないので規模や時期など不明な点が多い。SB2395は2.9m等間で南北に並ぶ柱穴2間分を検出した。SB2396は東妻の部分を検出した。梁行2間，4.6m等間で柱掘形にはすべて柱痕跡をとどめている。SB2398は西妻の部分を検出した。梁行2間，3.2m等間である。北側の柱穴は土坑SK2401と重複しており，土坑より新しい。SB2399は西妻の部分を検出した。梁行2間，3.2m等間である。SB2405は建物の南西隅柱とそこから北と東へそれぞれ1間分ずつ検出した。柱間4m等間で，柱穴にはいずれにも根石と思われる拳大の礫が数個認められた。SB2407は梁行2間，桁行3間以上の東西棟と推定される。柱間は梁行1.4m，桁行1.6m等間である。SB2407の北側柱列から北へ約12mのところに東西にのびる掘立柱塀SA2408がある。3間分を検出し，柱間は1.4m等間である。これら6棟の建物と塀の方位をみ



調査地全景（北から）

三条大路ＳＦ2400　遺構配置図・断面図（１：100）

ると，北で西に振れるもの（ＳＢ 2395 ・2396・2398・2405）と，北で東に振れるもの（ＳＢ2399・2407，ＳＡ2408）とがある。前者のうち，もっとも振れの大きいＳＢ2405を除いて，他の３棟の方位は等しい。後者ではいずれも同一方位を示している。このことから，ＳＢ2395 ・2396・2398の３棟，ＳＢ2399・2407およびＳＡ2408はそれぞれ同時期のものとみることが可能である。しかし，両者の新旧関係については今回の調査では明らかにできなかった。ただ藤原宮第16次・19次調査などにおいても小規模な掘立柱建物が確認されており，今回検出した６棟の建物と塀も共通の性格をもつと考えれば，７世紀後半の建物とすることができる。

藤原宮期以前の遺構　　ＳＤ2397は，東南から北西方向に流れる自然流路で，藤原宮期遺構検出面の下層で検出した。調査区西端近くで流路が二つにわかれている。幅は 0.7 ｍ前後で分岐する部分では 1.5 ｍ，深さは10㎝ほどである。遺物は出土していないが層位から弥生時代のものと思われる。ＳＤ2406は北西

方向に流れる素掘りの溝で，溝幅２ｍ前後，深さ0.５ｍである。布留式土器が出土している。

藤原宮期以後の遺構　いずれも中世以降のものである。ＳＥ2393は上部が破壊されているが，径１ｍの円形を呈する井戸で深さ0.４ｍ，底部径0.25ｍをはかる。底に小石を厚さ10㎝ほど敷いている。室町時代後半の土師器皿・土釜などの土器，瓦，曲物，箸などが出土している。

出土遺物　土器類，瓦塼類，木製品などがある。藤原宮期の遺物としては土器，瓦，塼がある。土器には須恵器，土師器があり，主として三条大路側溝と井戸から出土した。主な土器には大路側溝の須恵器・土師器と，井戸ＳＥ2417の須恵器長頸壷・短頸壷・杯Ｂ，土師器甕などがある。瓦の出土量は少なく，型式のわかるものは軒平瓦6641Ｆの１点のみで井戸ＳＥ2417から出土した。塼は縄叩き目のあるものでＳＥ2417から出土した。このほかに土器としては古墳時代の土師器が少量出土している。布留式土師器を出土したＳＤ2406を除いて遺構にともなうものはないが，大型の壷や小型丸底壷などがある。

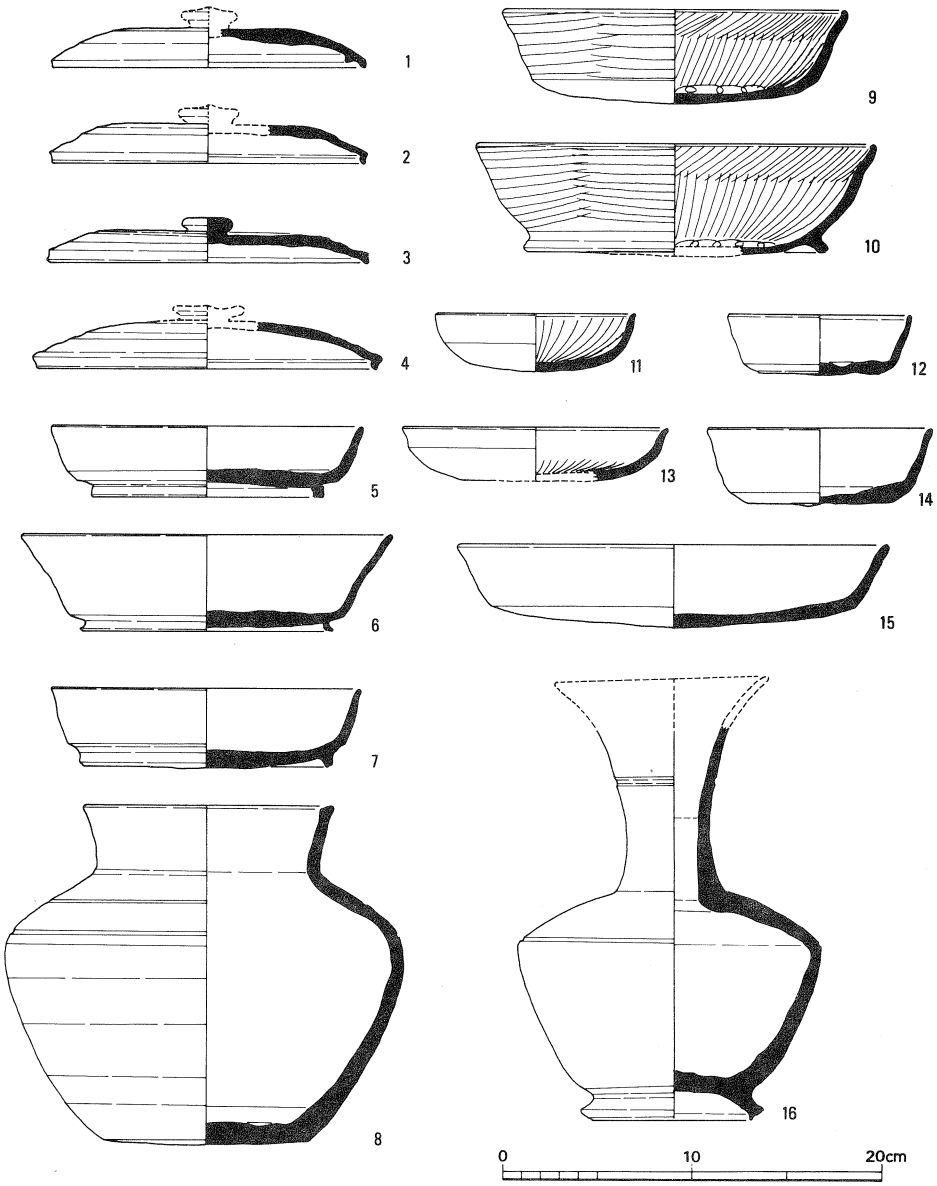
まとめ　今回の調査成果から藤原京条坊についてまとめておく。三条大路および四条条間小路南側溝の中心位置の座標は

三条大路ＳＦ2400	Ｘ＝－166,307,8	Ｙ＝－18,000,0
四条条間小路南側溝ＳＤ2390	Ｘ＝－166,449,1	Ｙ＝－18,000,0

である。

三条大路南北両側溝の心々距離は9.0ｍで３丈となる。藤原宮第27次調査（本概報）においても三条大路を確認しており，心々距離約９ｍである。大路両側溝の心々距離は，六条大路21ｍ（概報８），八条大路・西三坊大路15ｍ（概報６）で，第27－14次調査（本概報）では四条大路約16ｍである。このことから，三条大路の幅は他の大路に比べて狭いことが指摘できる。また，三条大路の国土方眼に対する振れは北へ0°32′24″(第27次調査との東西距離1040ｍ)，四条条間小路南側溝の振れは北へ0°54′（第27－14次調査との東西距離約1550ｍ）である。三条大路と四条条間小路ＳＦ1731間の距離（１町）であるが，今回の調査では四条条間小路北側溝を検出していないために道路心を決定できないが，

仮に四条条間小路が第27－14次で確認している幅（溝心々約７ｍ）と同規模であるとするならば，道路心々距離137.85ｍを得る。この値は従来知られている１町の値より長くなる。以上のように，今回の調査では条坊に関して三条大路の幅が他の大路より狭いこと，一町の実距離が長いという新たな知見を得たのである。しかし藤原京条坊制の詳細は今後の調査をまたねばならない。



藤原宮第25次出土土器実測図

１・２・９・10－三条大路側溝，３・４・14・15－ＳＥ2415，５・６・13－ＳＥ2413，７・８・16・－ＳＥ2417，11・12－ＳＫ2416

藤原宮第27次（東面北門）の調査

（昭和54年9月～昭和55年3月）

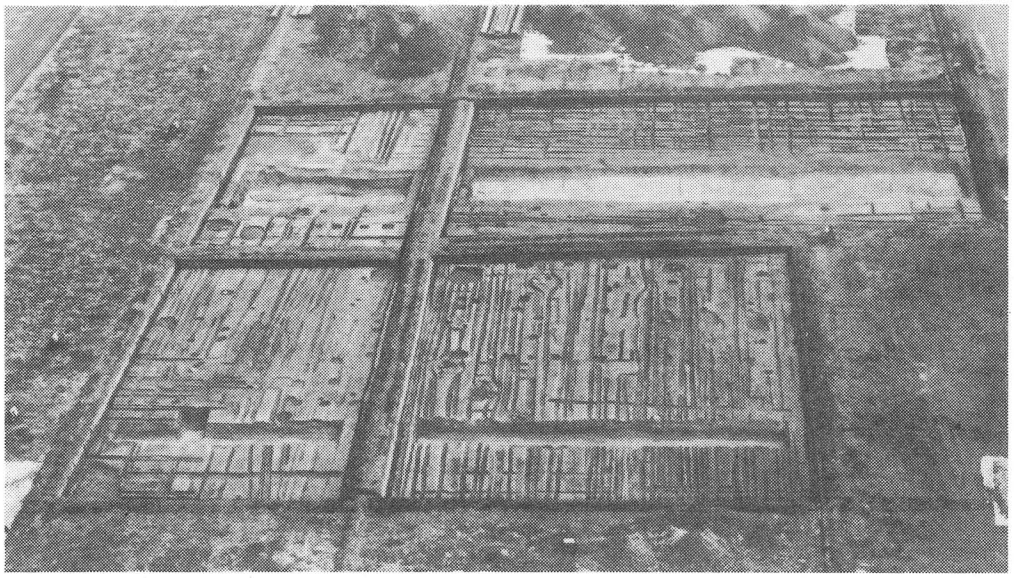
この調査は，主として藤原宮東面北門の位置及び規模と三条大路計画線の確認を目的として実施した。調査地は藤原宮大極殿の北東約500 mにあたり，昨年度おこなった第24次調査地に北接する。第24次調査では，藤原宮東面大垣とその内濠・外濠などを確認した。また，外濠の東に「仗舎」あるいは「厩亭」とも推定される南北棟建物を検出したが，桁行の規模については，今年度の調査にもちこされた。このような成果に基づき，南北52m，東西54mの範囲で発掘区を設定し，第27次調査を実施した。

検出した遺構は，藤原宮以前，藤原宮期，藤原宮廃絶後，その他に大別できる。以下，調査の主たる目的である藤原宮期の遺構について説明し，ついで，藤原宮期前後等の遺構の概略を述べることにする。

藤原宮期の遺構　藤原宮期の遺構には，藤原宮東面北門ＳＢ2500，同東面大垣ＳＡ175，内濠ＳＤ2300，外濠ＳＤ170，建物ＳＢ2290・2575・2576，溝ＳＤ2295，土坑ＳＫ2580がある。

東面北門ＳＢ2500は，後世に削平された結果，基壇土，礎石などを全くとどめていないが，数ケ所で残っていた根石から，東西２間，南北５間の礎石建物であることが判明した。そのなかで，もっとも遺存状況のよい中央列南から３番目の例では，径ほぼ1.5m前後の不整円形の掘形が残っており，そのなかに20～30cm大の石がつまっていた。なお，北面中門（第18次調査）でみられたような，礎石裾え付け位置にのみ土を互層につきかためた版築を施工するという基礎工法は認められなかった。また，基壇の掘込み地業もおこなっていない。柱間寸法は梁行，桁行とも約5.1m（17尺）等間とみられ，その平面規模は，藤原宮北面中門，平城宮朱雀門に一致する。

東面大垣ＳＡ175は，門の南側で４間分，門の北側で１間分を検出した。柱掘形は，一辺約1.5mの方形で，深さは約1.2m残っている。門の南側では，



調査地全景（西から）

いずれも柱を東方へ抜き取っているが，門の北側では，柱の抜き取りが認められない。柱間寸法は，第24次調査の結果と同様，2.66m（9尺）等間とみてよく，また，南北での門への取り付き部分も9尺として矛盾はない。

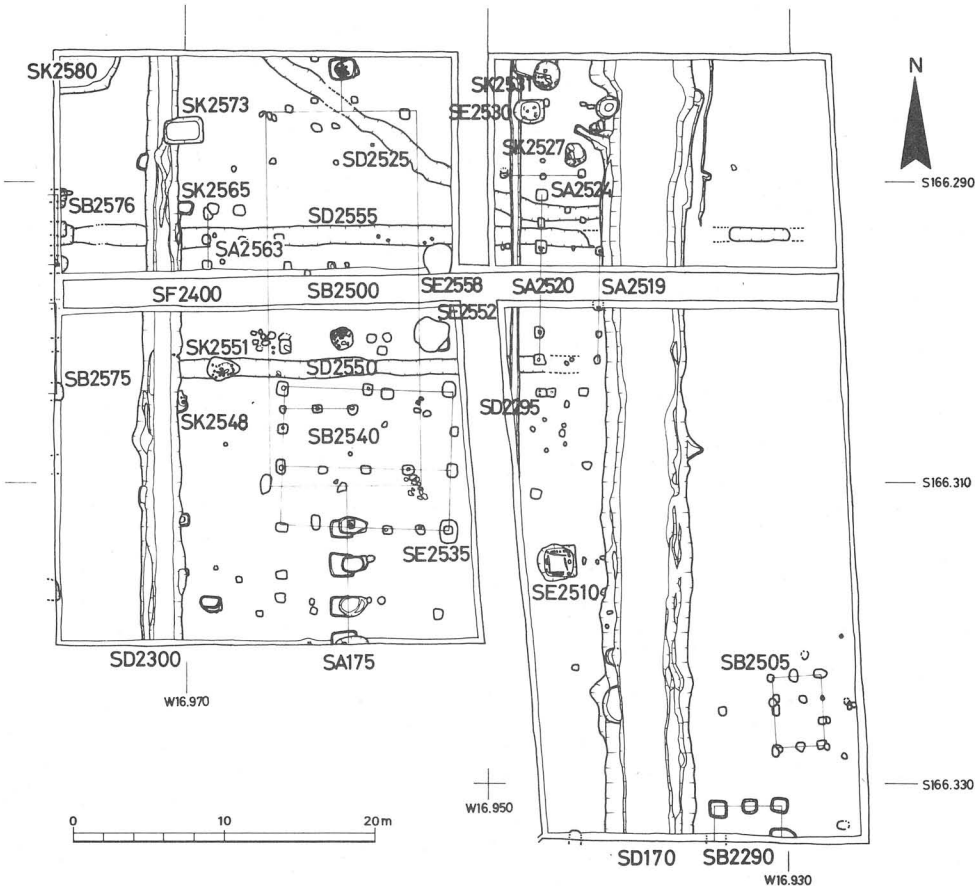
内濠SD2300は，大垣SA175の西約12mに位置する幅約2.5m，深さ約0.8mの素掘りの南北溝で，総長37m分を検出した。濠の断面は逆台形で，堆積土は3層にわかれ，第1層からは瓦類，第2層からは多量の土器類，第3層からは瓦類・土器類が出土した。木簡はごく少量出土したにとどまる。なお，濠の堆積土のうち第1層は，最終的に濠を埋め立てた土層と考えられる。

掘立柱建物SB2575・SB2576は，発掘区の西辺にかかった南北方向にならぶ柱穴列で，東西棟建物の東妻側柱列と考えられる柱掘形の一部を検出したにとどまる。SB2575は梁行約3.0m等間，SB2576は梁行約2.4m等間である。SB2576の東南隅にあたる柱掘形には礎板が残っていた。これらの建物は，東面北門（SB2500）の西で，内濠よりも西側にあり，官衙地区の存在を予想させる。このほか，内濠の西には，土坑SK2580がある。SK2580は，発掘区北西隅でその一部を検出したもので，東西約3.5m，南北約2.2mの範囲を確認した。深さ0.3m足らずが残る浅い土坑である。藤原宮式軒丸瓦の破片を含む

多量の瓦片を主に出土した。宮造営に際して生じた廃材を投棄したのであろう。

南北溝ＳＤ2295は，大垣ＳＤ175の東方約11.２ｍに位置する素掘りの南北溝である。幅約０.６ｍ，深さ約０.７ｍの規模をもち，断面はＵ字形を呈する。南の方が畦畔にかかるため，検出しえた長さは27ｍ分である。

外濠ＳＤ170は，大垣ＳＡ175の東方約20ｍにある素掘りの南北溝で，幅約５.５ｍ，深さ約１.２ｍの規模を有する。総長50ｍ分を検出した。なお，第18次調査で検出された橋脚のような施設は認められなかった。濠は，断面逆台形を呈し，堆積土は４層にわかれる。第１層からは少量の土器片，第２層からは軒瓦を含む大量の瓦類，第３層からは木簡をはじめとする木屑のほか瓦類・土器類，第４層からは瓦類及び木屑が主として出土した。外濠から出土した土器類の量は少ないが，瓦類は大量に出土した。また濠堆積土の第１層は，内濠と同様，



藤原宮第27次調査遺構配置図（１：500）

埋め立てた土層である。

掘立柱建物ＳＢ2290は，第24次調査で検出した「仗舎」あるいは「厩亭」とも推定される南北棟建物であり，今回の調査により，桁行７間の規模であることが明らかになった。柱掘形は，一辺 1.0 ～ 1.2 *m*のほぼ方形で，深さ約 0.5 *m*を残す。なお，柱間寸法は，梁行 2.1 *m*等間，桁行では，南３間が 1.8 *m*等間，北４間が 2.1 *m*等間と考えられる。

藤原宮以前の遺構　藤原宮以前の遺構のなかで，宮造営直前の主なものには三条大路計画線と掘立柱建物１がある。東西道路ＳＦ2400は三条大路計画線で，２条の東西溝ＳＤ2550・2555は，その南北の側溝である。南側溝ＳＤ2550は，幅 1.1 *m*前後，土層観察によれば深さは約 0.3 *m*の素掘りの溝である。内濠と外濠の間で総長25*m*分を検出した。北側溝ＳＤ2555は，幅 1.2 *m*前後，土層観察によれば深さ 0.3 *m*たらずの素掘りの溝である。外濠の東では部分的にしか残っていないが，それを含めて総長47*m*分を検出した。両溝の心々距離は約９*m*（３丈），三条大路路面幅は約 7.8 *m*となり，第25次調査（本概報）の結果とほぼ一致する。なお，三条大路計画線の位置は，

北側溝　X＝－ 166, 293, 5　　Y＝－ 16, 960, 0

南側溝　X＝－ 166, 302, 5　　Y＝－ 16, 960, 0

である。

掘立柱建物ＳＢ2505は，外濠の東，掘立柱建物ＳＢ2290の北東にある南北棟建物で，建物方位は北で西に 3°40′偏している。柱間は梁行が２間（1.7 *m*等間）桁行は，東側が３間（1.6 *m*等間），西側が２間（2.4 *m*等間）である。南西隅柱の柱抜き取り穴から藤原宮期の土師器甕，韓竈が出土した。

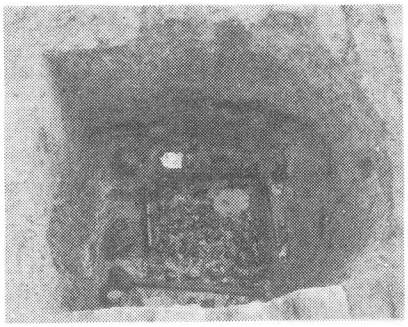
古墳時代の遺構としては溝１がある。斜行溝ＳＤ2525は，大路北側溝ＳＤ2555の北を流れる溝で，外濠より西方で25*m*分を検出した。畦畔北壁の土層観察により，さらに北西に続くことが知られるが，外濠の東方では検出されなかった。幅 1.2 *m*前後，深さ約 0.4 *m*の規模をもつ古墳時代前期の溝である。溝底のレベルにほとんど差が認められないため，流れの方向は不明である。

藤原宮廃絶後の遺構　藤原宮廃絶後の遺構には，建物１，塀２，井戸３，土

坑多数がある。それらは宮廃絶直後のものと平安時代以降のものとに大別できる。まず，宮廃絶直後と考えられる遺構について述べることにする。掘立柱塀ＳＡ2520は，北門東側柱列と外濠心のほぼ中間にある南北方向の塀である。ほぼ中央で畦畔にかかっているが，６間分を検出した。柱間寸法は1.8ｍ等間で，北から３番目の柱掘形の底には，軒丸瓦6275Ａを含む瓦が敷かれていた。方位は北でわずかに東に偏している。土坑ＳＫ2565・2573は，西側の部分が内濠にかかる土坑である。土坑2565は，東西約１ｍ，南北約0.9ｍの浅い土坑で瓦片を出土した。土坑ＳＫ2573は，東西約2.7ｍ，南北約1.8ｍ，深さ約0.9ｍの長方形の土坑で，藤原宮式軒丸瓦を含む瓦類と少量の土器片を出土した。

平安時代の遺構では，建物ＳＢ2540が注目される。これは，北門ＳＢ2500に重複する梁行２間，桁行４間，南側に廂が付く東西棟建物である。柱掘形には，柱痕跡をともなうものと柱位置に小規模な礎石状の石を置くものとがある。柱掘形の形をみると，身舎四隅では南北にやや長い長方形であるのに，他はほぼ方形か東西に長い長方形という特徴がある。柱間寸法は，梁行が2.7ｍ等間，桁行が2.85ｍ等間である。廂は東西５間で，柱間寸法は2.0～2.6ｍと不揃いであるが，東西端の柱位置が，身舎の東西側柱列の延長線上にくる。廂の出は3.8ｍである。建物方位は西で南に偏している。西妻柱の柱掘形の埋土には黒色土器が含まれていた。掘立柱塀ＳＡ2519は，塀ＳＡ2520の東，外濠の西岸に接してつくられた南北方向の塀である。柱間寸法は1.85ｍ等間で，４間分を検出した。その方位は北でやや東に偏しており，建物ＳＢ2540の方位とほぼ一致する。また，北端の柱掘形は，東端が一部外濠にかかっている。

井戸ＳＥ2510は，建物ＳＢ2540の南東，外濠の西に位置している。井戸掘形の一部が残っており、それは2.1ｍ前後の方形であったと推定される。西寄りに掘られた井戸枠の抜き取り穴は，一辺2.4ｍ前後の隅丸方形を呈する。現存の深さは約1.4ｍである。側板は残っていなかったが，縦板組の井戸で，桟の



井戸ＳＥ2510（北から）

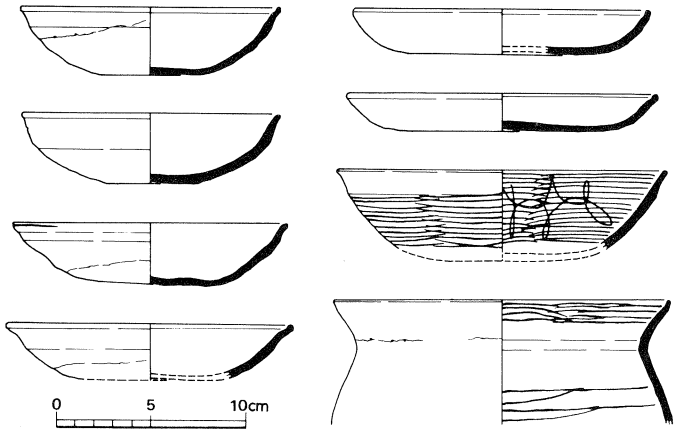
長さは約 1.2 m である。井戸枠内の底には径10cm前後の礫を敷いており，井戸枠の外周には人頭大の石を配して側板を固定していた。瓦片とともに黒色土器を出土した。

土坑 SK 2527・2531・2548・2551は，すべて，風化した花崗岩を投棄した径 1.5 m前後の不整形な土坑で，重複関係からみて，中世の細溝より新しい。井戸 SE 2552・2558も，上述の土坑と同様，時期の降るものである。

そのほかに塀 2，井戸 2 がある。掘立柱塀 SA 2524は，塀 SA 2520の北にある東西塀である。柱間寸法は 2.6 m 等間で，2 間分を検出した。掘立柱塀 SA 2563は，内濠の東，大路北側溝 SD 2555に重複する南北塀である。柱間寸法は 1.7 m 等間で，2 間分を検出した。いずれも所属時期は不明である。井戸 SE 2530は，南北溝 SD 2295に一部くいこんでつくられた縦板組の井戸である。井戸枠の抜き取り穴は，東西約 1.9 m，南北約 1.6 m の隅丸長方形である。底部は，東西約 1.4 m，南北約 1.3 m の隅丸方形を呈し，深さ約 1.4 m が残っている。側板の一部が残っており，井戸枠の内法は，一辺 0.9 m 前後と推定される。井戸 SE 2535は，建物 SB 2540の廂の柱掘形が重なっている井戸で，井戸枠の抜き取りは，東西約 1.3 m，南北約 1.7 m の不整形な楕円形の掘形をもつ。底部は一辺約 0.9 m の隅丸方形を呈し，深さ約 1.5 m の縦板組の井戸である。井戸側板の一部と桟が残っており，内法一辺約 0.7 m である。土師器，須恵器，土馬等が出土した。建物 SB 2540より古く，出土遺物は藤原宮期に属するが，北門の南東に接して位置する点などから，今後に問題を残す。

出土遺物　出土した主な遺物は，土器・瓦・木簡であり，それらの大半は，内濠と外濠からの出土である。土器には，内濠 SD 2300出土の土師器・須恵器と井戸 SE 2510から出土した黒色土器などがある。内濠出土の土器は，大勢として，第24次調査の結果と同様の傾向を示している。黒色土器は 9 世紀代のものである。また，墨書土器には，「醤」「麦□」などの文字の認められるものがある。このほか，製塩土器，土馬などが出土している。

瓦には軒丸瓦，軒平瓦，鬼瓦，熨斗瓦，丸瓦，平瓦がある。軒瓦は総数 367 点にのぼり，そのうち，内濠，外濠からの出土点数は 343 点である。軒丸瓦は



ＳＥ2510出土土器実測図

15型式169点（内濠９型式37点，外濠13型式132点），軒平瓦は14型式174点（内濠10型式24点，外濠13型式150点）を数える。型式としては，軒丸瓦6274 Aa，6276Ｃ，6279Ｂ，軒平瓦6646Ｃ，6647Ｃが目立つ。これらの出土地点を検当すると，その多くが外濠で且つ北門の東方にあたっている。特に北門の東方に限ると，先の軒丸瓦の３型式，軒平瓦の２型式で，それぞれ出土総点数の８割以上を占めている。この点から，上述したような軒丸瓦の出土状況は，北門所用軒瓦の組み合わせを考える上で考慮しなければならない。その反面，鬼瓦では，外濠から第24次調査で出土した三重弧文鬼瓦の同一個体片がいくつか出土し，この鬼瓦は，外濠の南北約60ｍの範囲にわたって散在していたことになる。

木簡は，ほとんどが外濠からの出土で，内濠からは２点出土したにすぎない。総点数880点にのぼるが，記載内容には，これといって際だった特徴はみられない。注目すべきものとしては，「少子部門」と「建部門」名を記した木簡がある。「少子部門」は宮城門としてはじめて知られた門号である。２つの門号のどちらかが東面北門名になるか否か，今のところ決定できない。年記のあるものとしては，「和銅元年」あるいは「□銅元年」があり，荷札がすべて郡表記であること，官司名，位階記載などからみても，大宝元年（701年）以後のもので，今回出土の木簡は，藤原宮時代のなかでも比較的新しいものである。ほかに「備前国」を「備道前国」という古様の書き方で記したものや，蓮華と人物の墨画があり興味深い。以下，主要なものの釈文を掲げておく。詳細につい

ては，『飛鳥藤原宮発掘調査出土木簡概報』（五）（昭和55年）を参照されたい。

以上述べてきたように，東面北門を中心とする今回の調査では，東面北門の位置及び規模を明らかにするとともに，宮造営に先立って施工された三条大路計画線も確認した。また，木簡から藤原宮東面門の１つに「少子部門」があることが判明した。加えて，建物ＳＢ2575・2576は，東方官衙地区の一画を占める建物になる可能性もあり，今後，門の西側の地域での調査に期待がかけられる。また，建物ＳＢ2505のように北で西に偏する建物方位をもつものが藤原宮以前，建物ＳＢ2540，塀ＳＡ2520のように北で東に偏する方位をもつものが藤原宮廃絶後であることが明らかになった。特に建物ＳＢ2540は，井戸ＳＥ2510をともなうと考えられ，その時期は９世紀を下限とすることが確かめられた。

〈木簡釈文〉

1 ・謹啓今忽有用処故醤
・及末醤欲給恐々謹請　馬寮
2 左右馬寮　神祇官
3 ・造兵司解　□〔麻カ〕□〔部カ〕□
・六□〔寸五分カ〕□□□□□
4 ・内膳司解供御□□□□
・□□御料塩三斗　□□□□
5 織部司解　□　□
6 ・謹□〔白カ〕造酒司正□麻□
・□□□□□□□
7 ・□〔皇大妃カ〕□宮職解
・□□□　□□□〔年カ〕□□
8 造木畫処　大初位下□〔阿カ〕□
9 ・□少初位上多治比橘連建麻呂
・「□□〔千カ〕麻呂」□多治比阿岐連牧夫
10 ・少子部門衛士□
・送建部□〔門カ〕
11 □大殿□□
12 ・南細殿　□
・□　□
13 ・□衛士四人馬人豊□〔嶋カ〕
・□
14 ・備道前国勝間田郡
・鴨里□□□□田部牟□
15 ・大伯郡長沼里
・縣使部加比俵
16 津刀里津守連□
17 参河国波豆郡矢田里白髪部小□□
18 ・安藝国安藝郡□里
・倉椅部□〔名代カ〕□調塩三斗

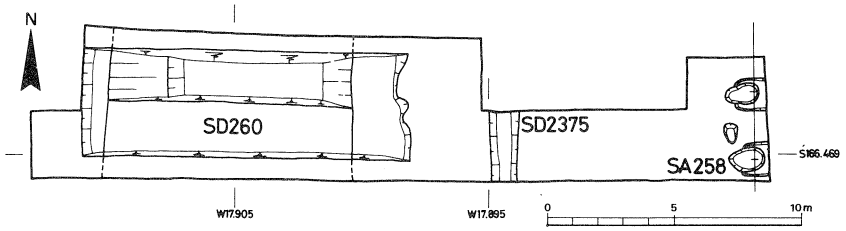
藤原宮第23－5次調査

（昭和54年3月～昭和54年4月）

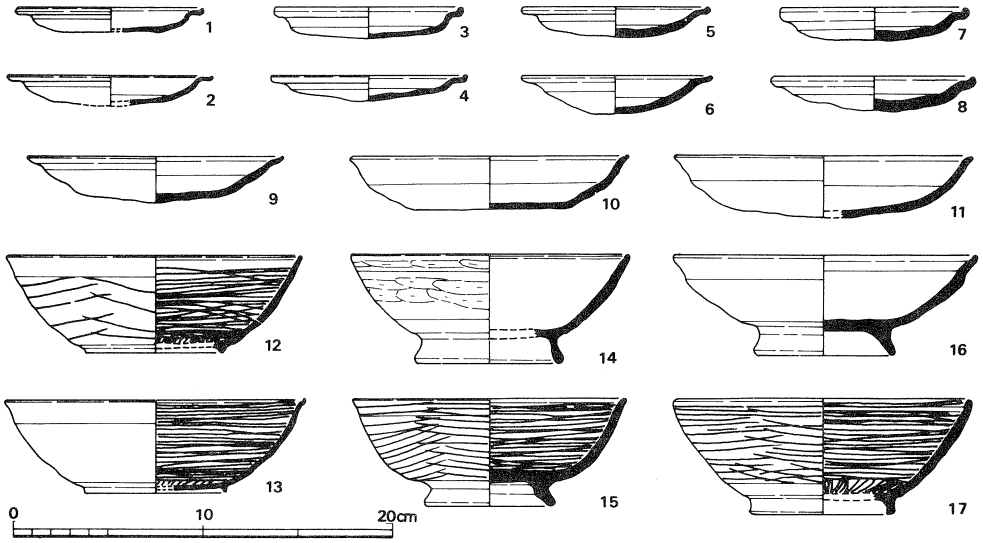
調査地は藤原宮大極殿の西方約450 m，縄手池の北方約160 mにある水田で，この地区は，藤原宮西面大垣と外濠の想定位置にあたる。調査区の層位は上から耕土，床土，灰褐色粘質土，黄褐色粘質土となり，地表下約1 mにある黄褐色粘質土の上面で遺構を検出した。検出した主な遺構には，藤原宮の西面大垣SA258，外濠SD260，南北溝SD2375がある。

西面大垣SA258は調査区の東端にあり，南北方向1間分を検出した。柱掘形は一辺約1.3 mで，柱は西側に抜き取られている。柱間を復原すると約2.65 mとなり，他の地区で確認されている大垣の柱間とほぼ一致する。外濠SD260は，当初は幅10 m，深さ1.9 mに掘られた素掘りの濠であるが，数度の改修を経て最終的には，幅8.8 m，深さ0.8 mになっている。濠の堆積層は4層に大別でき，濠から多量の土器のほかに瓦，銭貨（神功開宝，延喜通宝），土製品（土馬，ミニチュアの韓竈），金属製品（帯金具，鉄釘），木製品，馬骨などが出土した。なお，SD260とSA258の心々距離は20.7 mである。SA258とSD260の間には，南北溝SD2375がある。幅1.2 m，深さ0.4 mの素掘りの溝で，SA258との心々距離は約9.7 mである。藤原宮の東面大垣と外濠との間にも同様の南北溝を検出しており，SD2375も藤原宮に関係するものといえよう。この他に，南北方向の小溝を検出したが，いずれも中世以降である。

出土遺物には瓦塼類，土器，土製品，木製品，金属製品，石製品，銭貨と馬



藤原宮第23－5次調査遺構配置図（1：300）



出土土器実測図

骨，植物の種子などがある。外濠ＳＤ260から出土した土器には，藤原宮期から11世紀後半に至る時期のものが含まれ，土師器，須恵器，黒色土器，瓦器，施釉陶器，磁器がある。このうち瓦器は最上層からのみ出土した。図示したものは出土量の大半を占める平安時代の土器である。１～11・16は土師器，12～14は黒色土器Ａ類，15は黒色土器Ｂ類，17は瓦器である。17の瓦器椀の内底面には放射状の暗文がある。

今回の調査によって，これまで不明な点の多かった藤原宮の西面外濠・大垣の一部を明らかにすることができた。近年その解明に力をそそいできた東面外濠・大垣地区と比較して，西面外濠には若干の特色がみられる。すなわち，大垣からの距離には大差ないものの，西面外濠の幅は東面外濠の約２倍の10mとなっていることや，東面外濠が平城遷都の直後に埋没したと考えられるのに対して，西面外濠は，一部改修されながらも11世紀後半まで水路として機能し続けていることである。これらの特色は，西面外濠が単なる宮城区画の濠としてだけでなく，宮造営当初から基幹水路の一つとして位置づけられたことと，平城遷都後にこの地域周辺に営まれた奈良・平安時代の集落でも水路として踏襲されたことを示している。そして，外濠が埋められた11世紀後半以降，周辺の土地利用は根本的な変革をとげたといえよう。

藤原宮第27－1次の調査

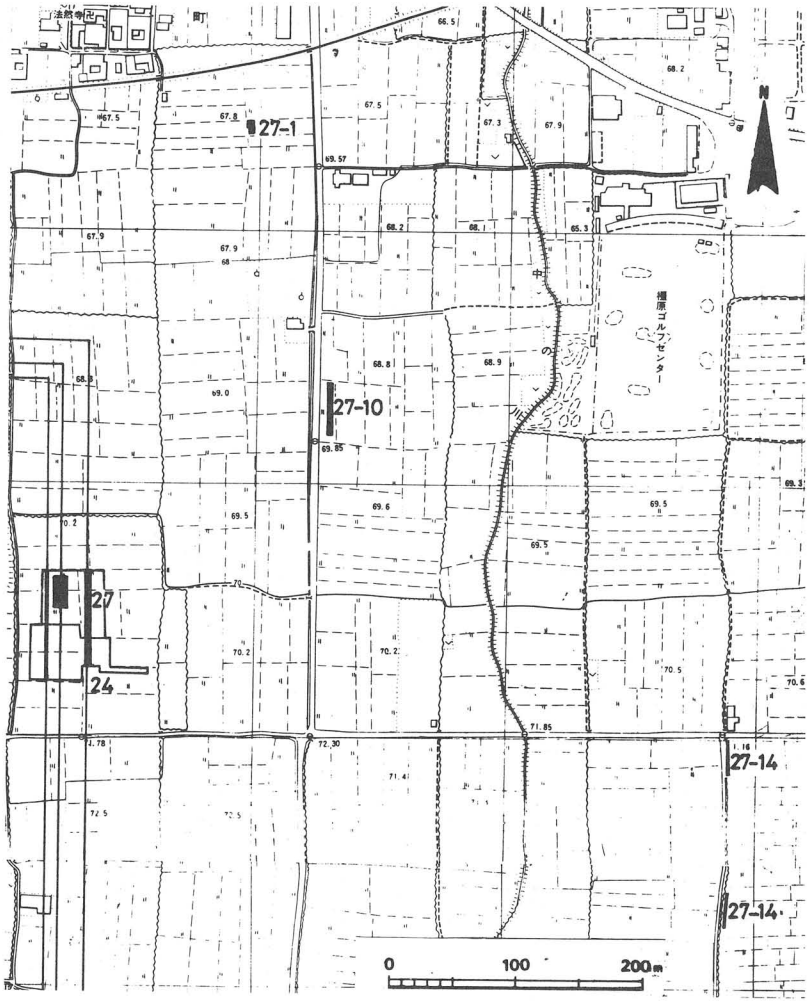
（昭和54年4月）

調査地は，市道165号線－小山線に面した水田で国鉄桜井線の踏切から50m南に位置する。また，藤原京条坊復原によると左京二条三坊の南西坪にあたる。

調査地の土層は，上から耕土，床土，茶褐色粘質土，灰褐色バラス層の順である。遺構はすべて耕土から深さ0.4mの茶褐色粘土層で検出された。

主な遺構には，藤原宮期の掘立柱塀1，古墳時代前期の溝1，弥生時代中期の土坑1がある。他に時期の不明な小穴がいくつかある。

SA2610は南北方向の掘立柱塀で，6間分検出された。柱間は，1.9m～2.7mでばらつきがある。方位は，ほぼ方眼方位にのる。SA2610と同じ並びで他に4個の柱穴が確認されたが

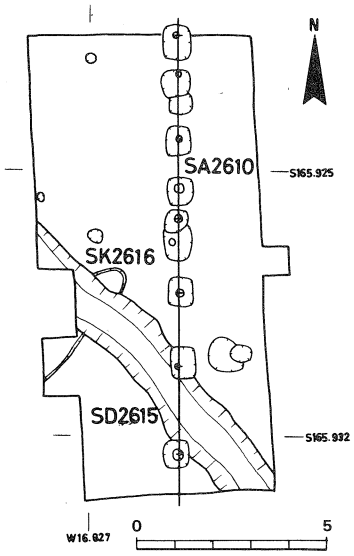


調査地位置図・第27－1次・第27－10次・第27－14次（1：6000）

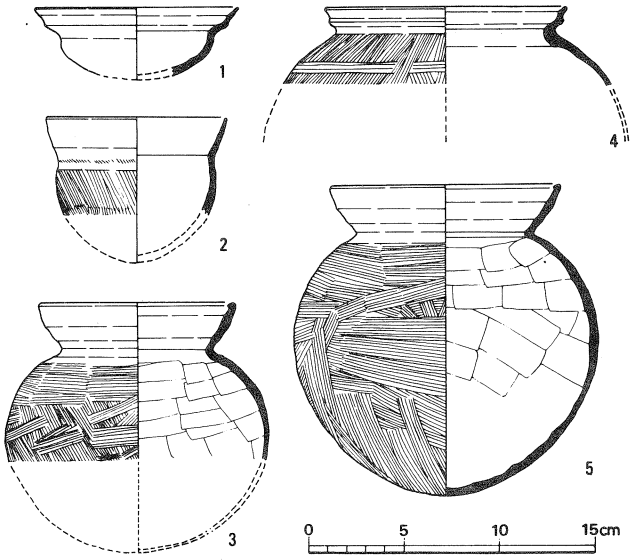
その性格は不明である。斜行溝ＳＤ2615は，南東から北西に流れる溝で幅 1.4 m，深さ 0.3 m の規模をもつ。堆積土からは，布留式の土器がまとまって出土した。ＳＫ2616は，ＳＤ2615と重複する不整形な土坑で，深さ 0.2 m。埋土からは小量の弥生式土器（畿内第Ⅲ様式）と石包丁１，石鏃１が出土した。

出土した遺物には，土師器，須恵器，石包丁，石鏃があるが，７世紀後半の遺物は少ない。図示したものはＳＤ2615出土の土器で，土師器には，壷・甕（３～５）・高杯・鉢（２）・小型丸底壷・小型高杯・小型杯（１）がある。甕の中には東海系のＳ字状口縁台付甕も認められる。これらの土器は，布留式の中でも比較的古い様相をもつものである。飛鳥地方の坂田寺下層出土遺物の中にその類例を求めることができる。

今回検出した掘立柱塀ＳＡ2610は，推定東二坊大路の心から東へ 68.9 mの位置にある。一坪（一町）の幅は，従来の調査で明らかになっているように 133 m 前後とすれば，ＳＡ2610の位置は左京二条三坊の南西坪を東と西にほぼ二分する位置にあたる。従って，ＳＡ2610は坪を分割する施設とも推定されるが，京内条坊街区の坪割の実態については，今後の調査による類例をまって，再度検討したい。



第27－１次調査遺構配置図(1：200)



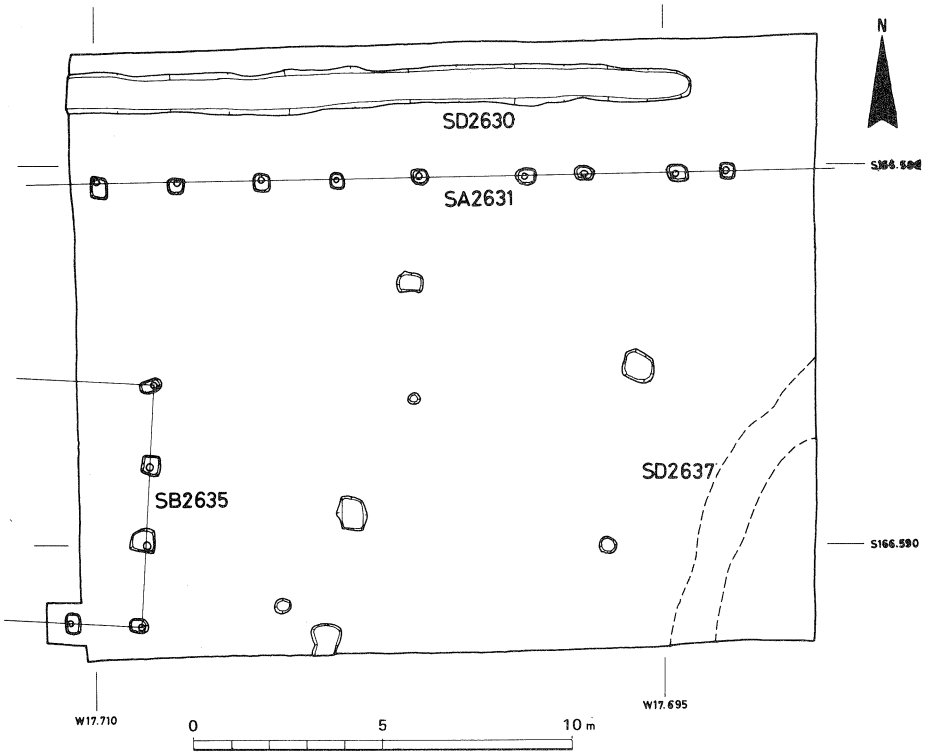
ＳＤ2615出土土器実測図

藤原宮第27－2次の調査

（昭和54年4月～昭和54年5月）

この調査は，家屋新築に伴なう事前調査として実施したものである。調査地は，鴨公小学校に北接する東西に細長い水田の東端，市道醍醐－飛弾線に面した所であり，南北17m，東西20mの調査区を設定した。現鴨公小学校の敷地内は，建設に際して事前調査を行っており，この地域が藤原宮西方官衙地区であることが判明している。また，京の条坊計画線の延長が宮造営予定地内に及んでいることや，宮造営以前には多数の掘立柱建物が営まれていたことが明らかになっている。それらの成果に照らせば，今回の調査地は，藤原京条坊制の呼称を宮内に及ぼした場合，五条西二坊の東北坪の東北隅にあたる。

調査地では，耕土・床土の下は黄灰色粘土あるいは暗褐色粘土の「地山」で



第27－2次調査遺構配置図（1：200）

あり，遺構はすべて「地山」面で検出した。「地山」は，縄文時代晩期から弥生時代に形成された沖積層で，特に暗褐色粘土層は，弥生式土器片を含んでいる。検出した主な遺構は，溝，掘立柱塀，掘立柱建物で，他に調査区全域を東西方向に走る多数の「小溝」や，調査区東南隅を斜めに横切る灰色砂の流路ＳＤ2637（時期不明）などがある。

調査区北端で検出した東西溝ＳＤ2630は，その西端では溝幅 1.2 m，深さ35 cmであるが，東へ除々に浅くなり，西端から約17 mの所で消失している。溝の埋土は褐色粘土まじりの青灰色砂土で，底には薄く灰色砂が堆積し流水の存在をうかがわせている。主にこの灰色砂層から藤原宮期直前の土器片が出土した。

東西方向の掘立柱塀ＳＡ2631は，ＳＤ2630の南 2.4 m に溝と平行に作られている。方位は，国土方眼に対して約 0°45′西で南に振れている。柱穴は方40 cmの掘形で，径15 cmの柱痕跡がある。いずれも深さ30 cm程度であり，先の溝とともに，後世に削平されたものとみられる。総長 16.6 m，８間分を検出したが，柱間は 1.4 m ～ 2.8 m と不ぞろいである。

掘立柱建物ＳＢ2635は，桁行３間，梁行２間の南北棟とみられ，その東半を検出した。柱穴は方50 cmの掘形に径20 cmの柱痕跡をもつ。桁行柱間総長は 6.3 m で，2.1 m 等間に割りつけられる。梁間は，南妻柱まで 1.8 m である。建物方位は北で 1°40′東に振れており，「西方官衙地区」でＡ－１期とした一群に含まれる。

他に，数個の柱穴を検出したが，いずれも建物とするには至らなかった。

ところで，ＳＤ2630とＳＡ2631の性格については，西方官衙地区の四条条間小路南側溝ＳＤ1250とその南のＳＡ1215との関係に酷似しており，四条条間小路ＳＦ1081から北へ１町の位置にあたっており，四条大路の幅員を50尺と想定すると，ＳＤ2630はちょうど大路の南側溝と考えることができる。したがってＳＡ2631は道路の外側の坪内を区切る塀となる。しかし，先の調査では，東北坪の西・南には同様の塀はなく，北辺についても対応する塀は確認されていない。このＡ－４期相当の坪割り及びその利用状況については，今後に課題をのこすことになる。

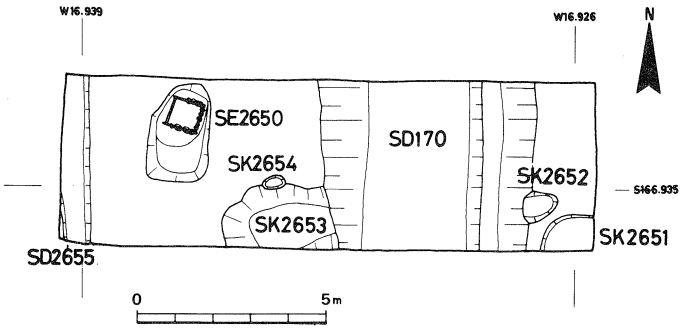
藤原宮第27－3次の調査

（昭和54年4月～昭和54年5月）

調査地は高所寺池の東方約70mにある水田で，藤原宮の東面外濠の推定位置でもある。遺構は耕土・床土下の地表から約50cmの深さにある黄灰色微砂層の上面で検出された。主な遺構には，弥生時代の土坑（SK2651～2653），7世紀後半の井戸（SE2650），藤原宮期の外濠と溝（SD170・2655），12世紀の土坑（SK2654）がある。

藤原宮期の東面外濠SD170は幅5.5m，深さ1.2mの規模である。外濠の堆積層は3層に大別され，少量の土器，木片が出土した。SD2655は外濠SD170の西方6mの位置にある素掘りの南北溝で，幅0.8m，深さ0.2mである。この溝は藤原宮第24次調査（概報9）で明らかにされている南北溝SD2295と一連のものと推定される。7世紀後半の井戸SE2650は，方形に並べた人頭大の玉石の上に井戸枠が一段残り，他の井戸枠はすべて抜き取られていた。検出面からの井戸の深さは1.3m，井戸枠の内法は一辺0.8mである。弥生時代の土坑3基の深さは15～35cmあり，いずれからも畿内第V様式の土器が出土した。

今回検出された東面外濠の規模は，第24次調査等によって明らかになった数値と大差ない。しかし，出土遺物は極端に少なく，他の地点で比較的多く出土している木簡，軒瓦はみられない。その一因として，今回の調査地が藤原宮の東南隅に近く，かつ外濠としては上流部にあたることがあげられよう。なお，第24次調査地と今回の調査地を結んだ東面外濠の軸線は方眼方位に対して北で西に約53′振れている。



第27－3次調査遺構配置図（1：200）

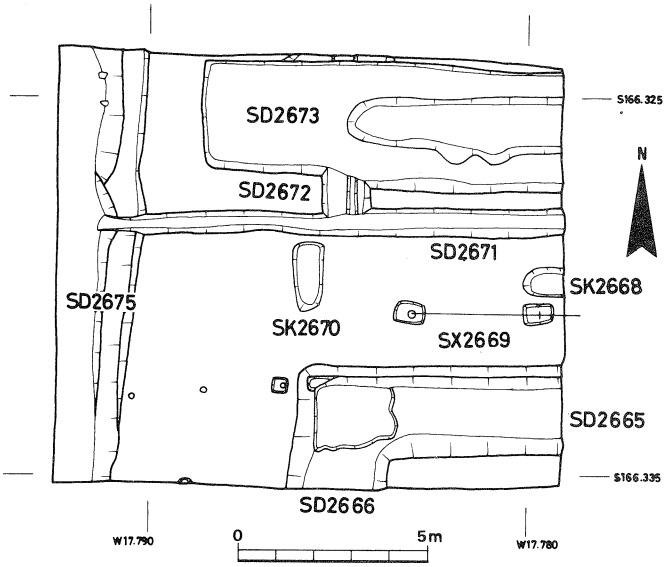
藤原宮第27－6次の調査

（昭和54年5月）

調査地は藤原宮大極殿の西北西方約380 mにある水田で，藤原宮の西北部の一画を占める位置にあたる。遺構は耕土・床土下の地表から40cmの深さで検出された。遺構の大半は黄褐色粘質土層の上面で検出されたが，調査区の北東部では自然流路の堆積層である暗褐色砂層の上面で検出されたものである。主な遺構には掘立柱塀1，素掘り溝6，土坑2があり，時期的に7世紀後半のもの（Ⅰ期）と中世のもの（Ⅱ期）に大別される。

Ⅰ期の遺構は東西に並ぶ柱掘形ＳＸ2669のみである。柱間は3.3 mで1間分あり，さらに東方へ続くものと推定される。柱掘形の埋土からは7世紀後半に位置づけられる須恵器が出土した。

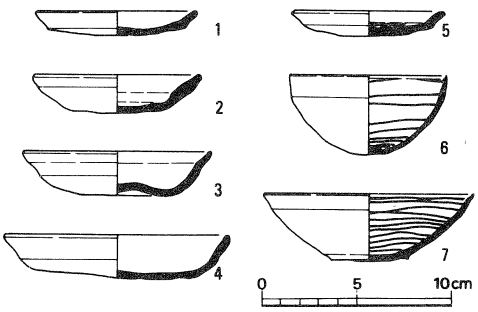
Ⅱ期の遺構は重複関係と出土遺物からさらに3期に細分できる。Ⅱ－1期の遺構は13世紀後半に位置づけられるもので，土坑ＳＫ2668・2670がある。ＳＫ2670は調査区のほぼ中央にある土坑で，南北1.8 m，東西0.8 m，深さ0.1 mの規模である。ＳＫ2668もＳＫ2670と同様の規模と思われる。これらの土坑からは瓦器椀，土師器皿，羽釜が出土した。



第27－6次調査遺構配置図（1：200）

Ⅱ－2期の遺構は14世紀後半に位置づけられるもので，溝ＳＤ2665・2666・2671・2672・2675がある。ＳＤ2665は幅2.5 m，深さ0.

7 mの規模をもつ東西溝で，西ではほぼ直角に南折してSD2666となる。溝のコーナーでは，SD2666の西壁が溝底近くで垂直面をなし，側板をあてていたような状況を示していた。溝の堆積層は3層に大別され，上層が暗褐色砂質土，中層が灰褐色粘質土，下層が青灰色粘質土となる。SD2671は幅0.8 m，深さ0.4 mの東西溝で，西に流れ南北溝SD2675と合流する。SD2675は幅3 m以上，深さ1.2 mの規模である。SD2672はSD2671に合流する南北溝で，その大半はSD2673によって破壊されている。



出土土器実測図

Ⅱ－3期の遺構は15世紀に位置づけられるもので，東西溝SD2673がある。幅3.8 m，深さ0.4 mあり東方へのびるが，土坑の可能性も残る。このほかに東西・南北方向の小溝がある。これらはいずれもⅡ－3期以降のものである。

出土遺物には土器・瓦がある。土器は藤原宮期のものは少なく，中世の瓦器・土師器が大半を占めている。図示したもののうち1・4・5・7はⅡ－1期の土坑SK2668から出土した。1・4は土師器，5・7は瓦器である。2・3・6はⅡ－2期の溝SD2665から出土した。6の瓦器椀は口径8.3 cm，高さ4.2 cmあり，外面の磨きはみられない。このほかにSD2665・2666からは14世紀に位置づけられる備前焼の壷，磁器，瓦質の羽釜等が出土した。

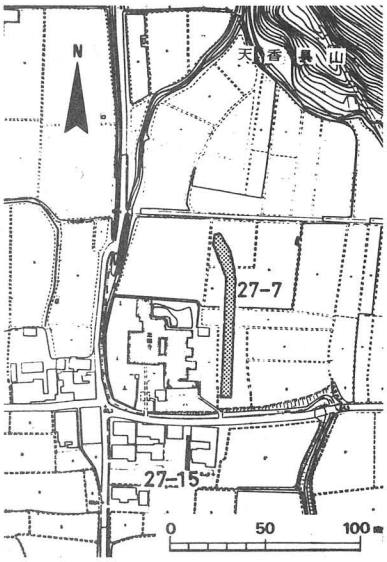
先述したように調査地は藤原宮の北西部にあたる位置にありながらも，確実に藤原宮とされる遺構は検出されなかった。中世の遺構の密度が高いことからみて，藤原宮期の遺構はすでに削平されたとも考えられる。Ⅱ－2期の遺構のうち，SD2665・2666のように出土遺物も多く，かつ直角に折れ曲る溝は通常の水路とは考え難く，むしろ集落を囲む機能をもっていたのではないかと推定される。また，SD2665・2671の溝肩間は約4.3 m，SD2666・2675間は約4.5 mとほぼ等しく，この空間地を通路とみなすことも可能である。いずれにしても今後の調査を待ちたい。

藤原宮第27－7次の調査

（昭和54年5月～昭和54年6月）

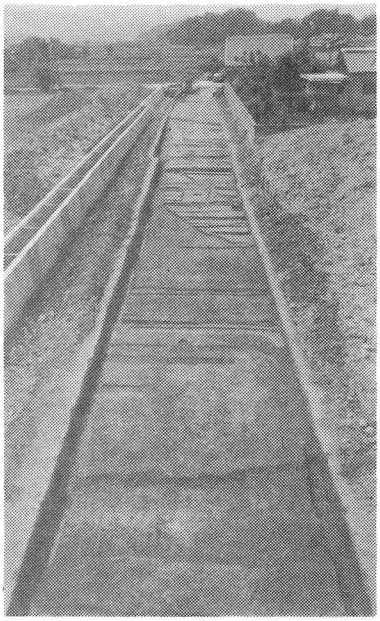
橿原市出合から明日香村へ至る市道（R 165号－小山線）は，昭和51年以降北から順次拡張されてきた。今年度は，小山の集落を迂回し，法然寺の東を通るバイパスを新設する計画があり，その建設予定地で事前調査を行った。

調査地は，天香久山の西南裾に位置し，周辺よりもわずかに低地である。この低地は，飛鳥地域の東丘陵に発して折れ曲りながら西北流して天香久山の西を北流する中の川の流路に当る。また，調査地は推定藤原京の条坊では，左京八条三坊の東南坪である。



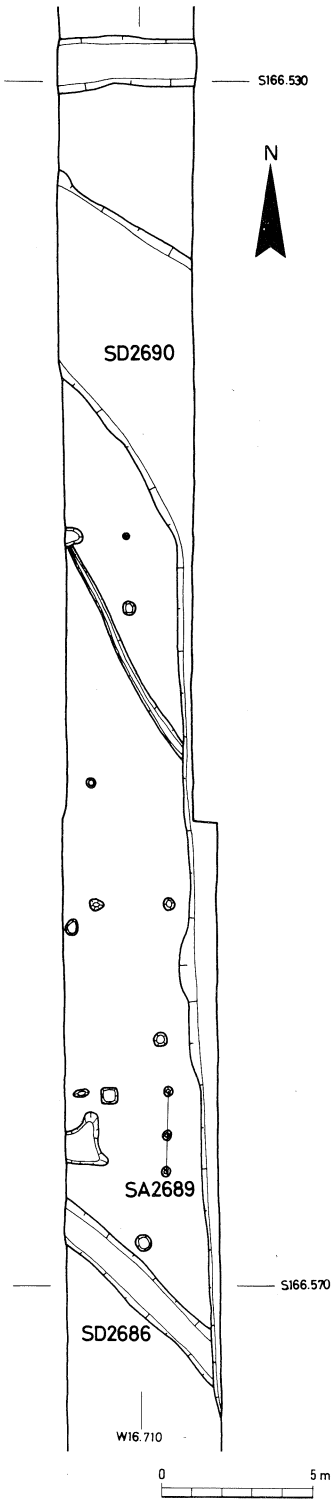
調査地位置図（1：400）

調査は，完成していた道路擁壁と農業用水路にそって，その西に，東西幅5m，南北長さ約80mの調査区を設定し，実施した。水田耕土と床土は工事の一貫として除去されていた。遺構はさらに30cmの茶褐色粘土を除去したバラス層か暗茶褐色粘土層の上面で検出した。このバラス層は，後述の斜行溝よりも古い時期に形成された堆積層で，調査区の北と南で見られた。中央では，バラス層の凹みに堆積した砂層・黄褐色粘土および暗茶褐色粘土が横切っていた。



調査地全景（北から）

検出した主な遺構には，弥生時代の斜行溝1，7・8世紀の南北溝1，掘立柱塀1があり，ほかに，柱穴・土坑と多くの細溝がある。



第27－7次調査遺構配置図(1：250)

斜行溝ＳＤ2686は，調査区の南寄りで検出した。規模は溝幅1.2ｍ，深さ0.2ｍで，地勢に従って北西に流れる。堆積土である暗褐色砂礫層からは，弥生時代後期（畿内第五様式中頃）の土器と石鏃・磨製石斧などが出土した。

南北溝ＳＤ2690は，調査区の東端を北でやや西に振れた方向に流れる溝で，調査区の中程からは大きく西方に曲がっている。埋土である炭化物を含む褐色粘土層からは，７世紀代～８世紀初め頃の土器が出土した。また，この溝の北側に拡がるバラス層上面には，溝から流出したと思われる遺物が散布し，その中に円面硯１点があった。

掘立柱塀ＳＡ2689は，斜行溝の北で検出した南北２間（2.7ｍ）の塀で，直径30㎝の小柱穴には灰褐色粘土が入っていた。時期については，南北溝ＳＤ2690の傾きに近いものの，詳細は不明である。その他，調査区中央で数個の柱穴を検出したが，いずれも建物にはまとまらなかった。

今回の調査地は藤原京左京八条三坊西南坪にあたるが，藤原宮期の明確な遺構は確認できなかった。ただ，南北溝ＳＤ2690に含まれた豊富な遺物や，その北方で出土した円面硯などは，この付近に同期の遺構の存在を示すものである。また，斜行溝ＳＤ2680については，調査地の東南0.5㎞に位置する大官大寺の下層で検出された弥生時代の遺構や，西北1.2㎞に位置する四分遺跡と関連して，弥生時代の集落立地とその拡がりを追求する上で重要な資料を得たものと言える。

藤原宮第27—14次の調査

（昭和55年1月）

この調査は出屋敷・膳夫間の道路拡幅工事に伴う事前調査として実施した。調査地は天香久山の北方400～500ｍの水田で，藤原京左京四条四坊と五条四坊の一部にあたる。調査地を藤原京四条々間小路と四条大路の推定位置2ケ所に，幅約3ｍのトレンチで設け，条坊遺構の検出に主眼をおいた。調査の結果，所期の目的どおり北部トレンチにおいて四条々間小路を，南部トレンチにおいて四条大路を検出した。

北部トレンチの土層は，上から耕土，床土，灰褐色粘質土，茶褐色粗砂となり，茶褐色粗砂層上面（表土下0.4ｍ）において，四条々間小路両側溝を検出した。側溝はともに幅0.8ｍ，深さ0.16ｍの素掘り溝で，暗灰茶褐色粘質土が充満する。小路の路面幅は確認面で6.3ｍ，側溝心々で7.12ｍである。

南部トレンチは3筆の水田にまたがり全長27ｍである。四条大路北側溝は遺存状態が悪く，幅0.6ｍ，深さ0.14ｍの溝底近くを検出したにとどまる。これに対して南側溝の残りは良く，幅1.5ｍ，深さ0.4ｍの素掘り溝を検出した。溝内には暗灰茶褐色粗砂が堆積し，藤原宮期の土器片が含まれる。側溝壁の立ち上がりは，ともに路面側が急傾斜であるのに対し，坪側は緩傾斜で立ち上がる。四条大路の路面幅は確認面で14.9ｍ，側溝心々で15.8ｍである。

今回検出した四条大路と四条々間小路の路心間の距離は136.2ｍである。この数値は，従来の条坊の調査で得られた1町の長さに近似する。四条々間小路はこれまで5ケ所で確認されている。第20次調査で検出した四条々間小路・朱雀大路計画線の交点と，今回検出した四条々間小路心を結ぶ方位は，方眼方位に対して東で北へ35′強の振れを示す。この振れは宮中軸線の振れ26′30″に較べてやや大きい。今回初めて検出した四条大路は，宮の東面中門にとりつく道路であるが，路面幅員が15ｍ（5丈）の大路であることが明らかになった。

（調査位置は20Ｐの位置図に示す）。

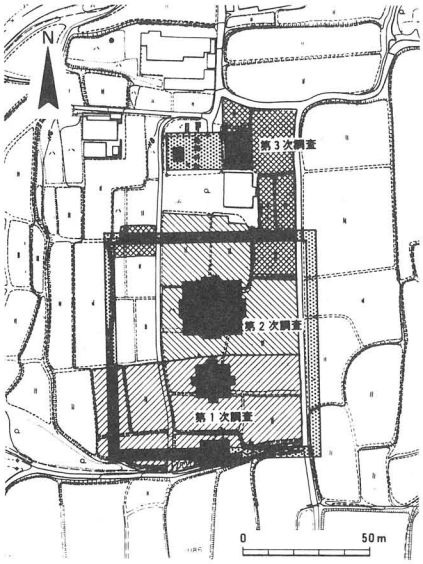
山田寺第３次（講堂・北面回廊）の調査

（昭和54年５月～昭和54年９月）

山田寺跡については，昭和51年度から発掘調査を継続して行ってきており，すでに第１次調査として塔・中門・西面回廊跡，第２次調査として金堂・北面回廊跡について実施してきた。両次の調査によって，塔・金堂の規模を確認し，伽藍配置についても従来考えられていたような四天王寺式伽藍配置ではなく，北面回廊が金堂と塔のみを囲む形式であることが判明した。今回の調査は講堂・北面回廊跡の検出を目的として実施した。所有地の関係で調査区を，講堂の東半部から北面回廊の東半部に至る地区（東調査区），講堂北方地区，北面回廊の西半部地区（西調査区）の３ケ所に設定するとともに，講堂西半部に現存する礎石等についての実測調査を行った（位置図参照）。

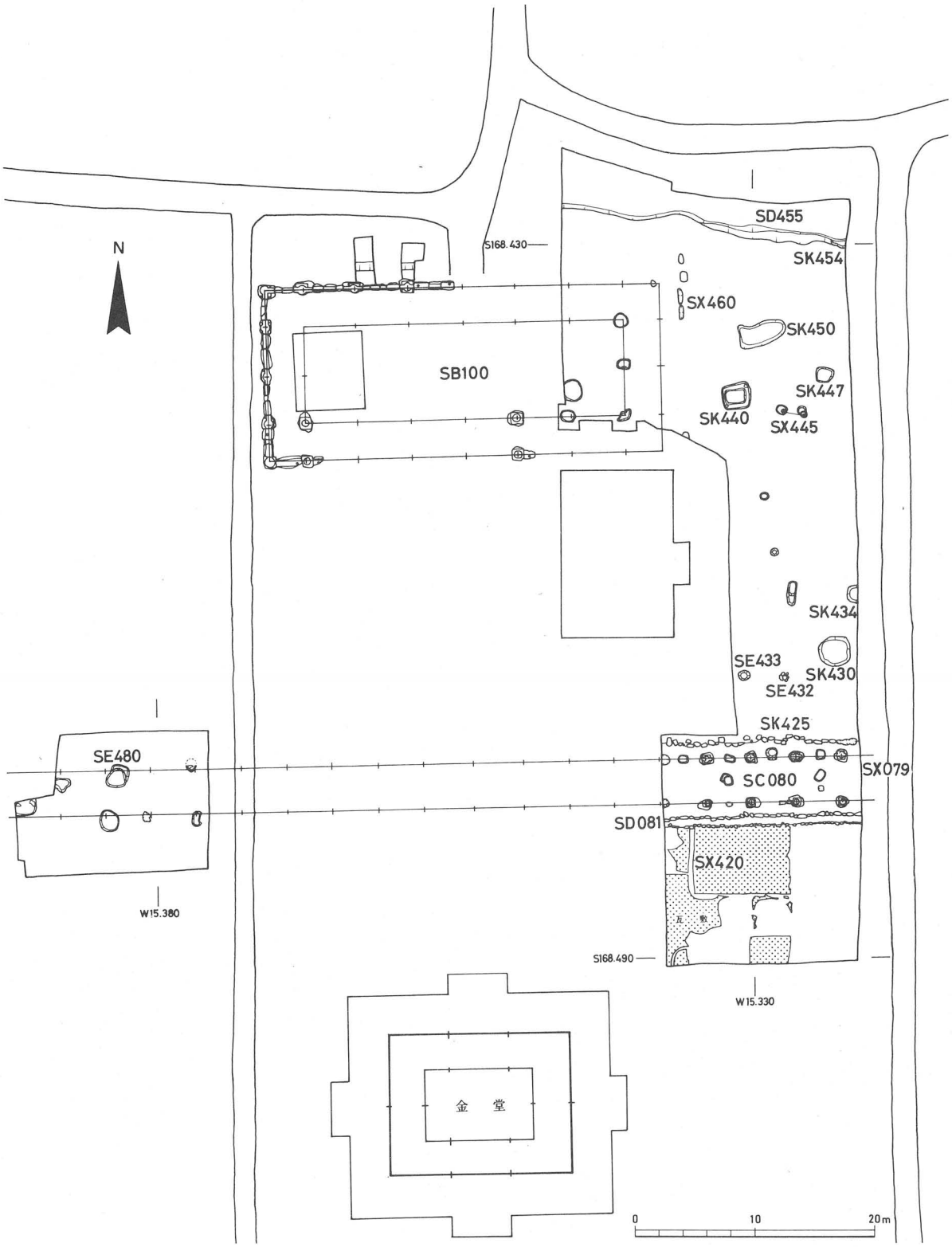
検出した遺構には講堂・北面回廊のほかに井戸３，土坑６，溝などがあるが，ここでは主として，講堂・北面回廊の遺構について概要を述べる。

講堂（ＳＢ100）　講堂の基壇の大半は現境内の中にあり，礎石や地覆石が良好な状態で残っている。発掘調査を行った講堂の東半部は，現境内よりも一段低い水田である。この地区は明治時代の水田化に伴って著しく削平されており，礎石や基壇土は残っていない。遺構は全て耕土・床土下にある地山面で検出された。遺構検出面の深さは地表から20～30㎝である。



調査地位置図（１：3000）

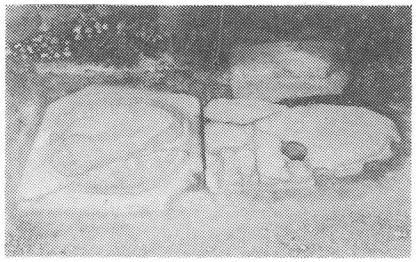
遺構検出の結果，礎石抜取跡５ケ所と基壇の地覆石抜取跡２ケ所を確認した。境内には創建時の位置を保つと推定される礎石が12ケ所に残っており，それらと今回検出された礎石抜取跡から講堂の平面規模を復原すると，桁行６間・梁行２間の身舎に四面廂のつく建



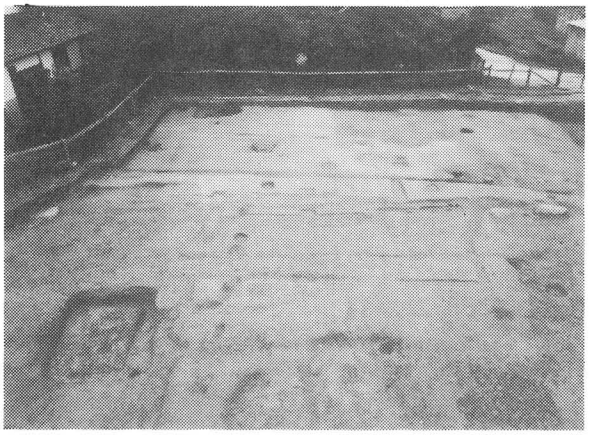
山田寺第３次調査遺構配置図（１：500）

物で，桁行８間（総長111尺）・梁行４間（総長48尺）の規模となる。また，講堂の中軸線は伽藍中軸線とほぼ一致し，伽藍中軸線上に柱位置があることになる。このことから各礎石抜取跡は，建物の東北隅，身舎の東妻柱列の３ケ所，身舎の南側柱の東から２番目に相当することになる。柱間は規準尺を29.75ｍとすると，桁行では中６間が15尺等間，両端間が10.５尺，梁間は中２間が13.５尺，両端間が10.５尺である。

現存する礎石は花崗岩製で，一辺１ｍの方座の上に，下面径0.８～0.９ｍ・上面径0.７～0.75ｍ・高さ0.１ｍの円柱座が造出されている。ただ金堂や北面回廊の礎石のような蓮華座はみられない。また，北側柱列と西妻柱列の礎石には地覆座があるが，南側柱列と身舎部の礎石にはない。地覆石は礎石と同じく花崗岩からなり，上面には幅約38㎝，高さ15㎝の地覆座を造り出す。長さは0.５ｍ～2.４ｍと一定でないが，これを礎石間に１～３個ならべている。そして南側柱列で３ケ所，西妻柱列で１ケ所，北側柱列で２ケ所に扉の軸を受ける軸摺り穴が穿たれている。軸摺り穴は，いずれも直径15㎝，深さ10㎝である。南側柱列の西端間と西妻柱列の南端間では軸摺り穴が一方に寄って一ケ所にのみあることから片開きの扉であったとみられる。北側柱列では西から４間目の地覆石に２ケ所の軸摺り穴がある。以上の軸摺り穴の配置状況と講堂の中軸線を参考にすると，講堂の南面はすべて扉で開放し，そのうち両端間は片開きの扉となる。東・西面は南端間だけ片開きの扉をつけ，他は壁となる。そして北面では中央２間を両開きの扉としていた。



講堂南側柱礎石



講堂調査区全景（東から）

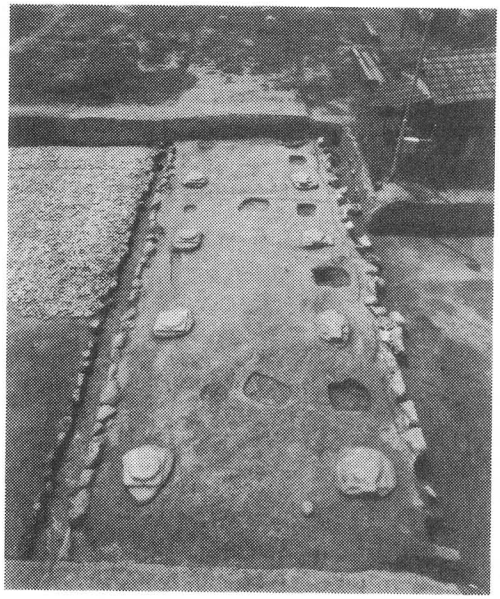
基壇の化粧石は全て抜取られており，地覆石抜取跡ＳＸ460を検出しただけである。ＳＸ460は東妻柱列の東約２ｍにある南北方向の抜取跡で，幅35㎝，深さ６㎝ある。ＳＸ460の位置を基壇端とすると，基壇の出は東妻柱列から約７尺となる。抜取跡の埋土には焼土・花崗岩片が含まれており，その周囲にも凝灰岩片が散乱しているから，基壇化粧は塔・金堂と同じく，地覆石に花崗岩，羽目石・葛石に凝灰岩を用いた壇上積基壇と推定される。基壇高は，旧地表面が削平されているので正確には求められないが，ＳＸ460の東部の地山面から礎石上面までの高さは約75㎝ある。また，建物の桁行と梁行の総長が各々111尺と48尺で，基壇の出が７尺とすれば基壇規模は東西125尺，南北62尺と推定される。なお，今回の調査区では階段部の遺構は検出されなかった。

基壇築成の状況は，講堂北方に設定した調査区において知ることができた。すなわち，基壇築成にあたっては，塔や金堂にみられた掘込み地業は行なわず，地山を削平した後，その上に直接版築を行っている。版築層は粘質土と砂質土を交互につき固めたもので，一層の厚さは５～15㎝ある。礎石の据付け穴は，基壇築成の途中で掘られ，根固め石を使用せずに礎石を設置した後，さらに版築を行って基壇を完成している。この手順は金堂や北面回廊と同じである。

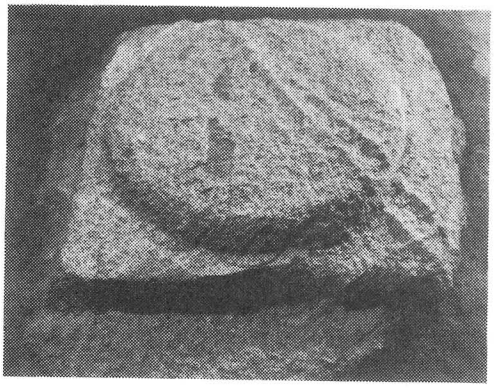
金堂・塔周辺は，奈良時代に瓦敷，平安時代にバラス敷で舗装されていたことが判明しているが，講堂周辺では，それらの痕跡はなかった。これは回廊に囲まれた塔・金堂の区画のみに舗装を行い，聖域視した結果であろうか。

北面回廊（ＳＣ080）　第２次調査では，北面回廊は金堂と講堂との間にあり，伽藍中軸線上に柱位置のくることが判明している。その際検出された北面回廊は中軸線から東と西へ各々４間分の計８間分であった。今回の調査では北面回廊の東西の規模を明らかにするために東調査区と西調査区を設定した。

東調査区は第２次調査区に東接する水田で，一部第２次調査区と重複している。回廊部分の堆積層は，耕土層（厚さ25㎝），床土層（12～15㎝），茶褐色粘質土層（13～20㎝），灰褐色砂質土層（５～10㎝），基壇土，地山となる。茶褐色粘質土層は，瓦堆積層ともよぶべきもので，多くの瓦とともに12～13世紀の瓦器が出土した。灰褐色砂質土層も２次堆積層である。回廊北方では灰褐



北面回廊ＳＣ080（東から）



北面回廊 南側柱列礎石

色砂質土層と地山との間に灰褐色粘質土層があり，11世紀の土器が出土した。地山は岩盤の風化した黄褐色砂質土で，回廊基壇の北方は一段低い。

調査の結果，回廊基壇の上面は削平されていたが，礎石，雨落溝が良好な状態で検出された。回廊は梁行１間の単廊で４間分あり，第２次調査結果とあわせると伽藍中軸線から東へ８間分が検出されたことになる。礎石にいずれも花崗岩製で風化が著しいが，観察の結果，回廊の礎石にも金堂の礎石と同様に蓮華座のあることが判明した。南側柱列の礎石は方座（下辺約70㎝，上辺約30㎝，高さ約 6.3 ㎝）の上に単弁十二弁の蓮華座（下面径約63㎝，上面径約45㎝，高さ約 7.5 ㎝）が造り出されている。北側柱列の礎石にもわずかに蓮華文の浮彫りが残っている。また，北側柱列礎石の蓮華座の両端には上面幅約27㎝の地覆座が造出されているから，回廊の北側は壁で仕切られ，南面のみ開放されていたようである。

北側柱列礎石間には地覆石や地覆石抜取跡はなかった。回廊の南側柱列の柱筋には，先述した茶褐色粘質土層中に据えられた榛原石の切石３個がある。榛原石は長さ50～60㎝，幅約27㎝，厚さ 9.5 ～16㎝あり，側面に地覆座を造出したと考えられる加工痕が認められる。礎石の両端にある地覆座の幅と榛原石の幅がほぼ一致することや，地覆石の掘形および抜取跡が検出されていないことから，地覆石は榛原石の切石であった可能性が強い。現存する礎石の上面は石

によって高低があり水平でなく，約10㎝の高低差がある。そのため，基壇高として仮に西端の礎石上面までの高さを求めると，南の瓦敷上面から約35㎝，北の地山面から約70㎝となる。

回廊基壇の化粧は，基壇縁石として長さ30～80㎝の野面石を一列に並べた簡単なものである。基壇幅は，縁石の傾きによって6.3～6.55ｍとばらついているが，本来は6.3ｍ（21尺）と考えられる。

基壇は地山を削り出して基底部を造り，その上に版築をして築成されている。版築層は粘質土と砂質土を交互につき固めており，一層の厚さは4～9㎝で6層，厚さ26㎝ほどを確認した。礎石の据え付け状況は金堂・講堂と同様であり，根固め石も使用されていない。また，基壇の化粧石を据えつけるにあたっては，版築層の上面から基壇縁を溝状に掘り，縁石を設置している。縁石の掘形の埋土からは少量の瓦片が出土した。

回廊の南側雨落溝（ＳＣ081）は側石にのみ玉石を用いた溝で，内法幅約60㎝，深さ約20㎝ある。北の側石は基壇の縁石を共用し，南の側石は基壇縁石より小型の石が用いられている。溝は下層に暗茶褐色粘質土，上層に灰褐色土が堆積し，上層からは多量の瓦が出土した。基壇北側の雨落溝は，側石の抜取跡も認められないことや旧地表面がもともと低かったと推定されることから，本来，雨落溝は設けられなかった可能性が強い。

北側柱列の礎石のほぼ中間に掘られた掘立柱列ＳＸ079は，第2次調査で検出されたものの東延長部にあたる。調査区東壁にあるものを含めて4間分あり，柱間は3.45～3.8ｍとばらついている。掘形は一辺60～90㎝，深さ45～58㎝あり，版築層の上面から掘込まれている。礎石据付け時よりも後で掘られているが，掘形の埋土から出土する土器は7世紀後半のものである。回廊建設時の足場穴とも考えられず，その性格は不明である。

西調査区は後世の水田化によって著しく削平されており，東調査区よりも1～1.25ｍ低くなっている。そのため，回廊に関係する遺構としては礎石落込み穴7ケ所を検出したにとどまった。礎石落込み穴に礎石はなく，後世に礎石は抜き取られ，穴の底面には霜爛した花崗岩粉のみが付着していた。調査区の西

端にある礎石落込み穴は，伽藍中軸線から西へ10間目の礎石を落込んだものと推定される。伽藍中軸線から西へ10間目が，北面回廊の西隅の間にあたるのか，さらに1間西に延びるかについては調査区の関係で確認できなかった。

東調査区の回廊南方においては，奈良時代の瓦敷，平安時代のバラス敷が検出された。いずれも第1・2次調査で検出されているものと一連のものである。瓦敷はほぼ方形に区画するように敷かれており，方形のブロック間には，ＳＸ420のように瓦の敷かれていない溝状の空間地がある。おそらく，水抜きのような機能を有していたものであろう。

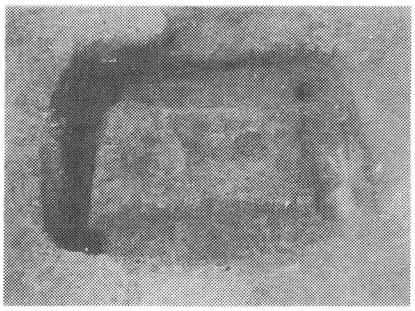
その他の遺構　講堂・北面回廊周辺に掘られた井戸，土坑，溝がある。これらの遺構は年代的に多岐にわたり，Ⅰ期－7世紀後半，Ⅱ期－平安時代，Ⅲ期－鎌倉・室町時代およびそれ以降のものに大別できる。ここではⅠ期の遺構とその他の時期の主要な遺構について述べる。

Ⅰ期の遺構には土坑ＳＫ430・454がある。ＳＫ430は回廊の北方6ｍにある円形の土坑で，径2.7ｍ，深さ0.25ｍである。少量の瓦，土師器，須恵器が出土した。ＳＫ454は調査区の北東部にある不整形な土坑である。赤褐色粘質土が堆積し，土師器，須恵器が出土した。

Ⅱ期の遺構にはＳＫ434，ＳＸ445，ＳＫ447がある。ＳＫ434はⅠ期の土坑ＳＫ430の北にあり，灰褐色粘質土の上面から掘込まれている。南北1.5ｍ，東西1.2ｍ，深さ0.4ｍであり，投棄された状態を示す多量の瓦とともに瓦器椀，土師器皿が出土した。

Ⅲ期の遺構には井戸ＳＥ432・433・480，土坑ＳＫ425・440・450，溝ＳＤ455がある。ＳＤ455は調査区の北端を東西に流れる大溝で，幅4ｍ以上，深さ2.4ｍの規模をもつ。13～15世紀の遺物が出土した。ＳＫ440は講堂の東にある方形の土坑で，一辺2.3ｍ，深さ0.3ｍである。側壁下には幅0.2～0.3ｍ，深さ0.1ｍの溝が巡っている。従って，土坑の底面は一段高くなる。土坑内の北東隅と南西隅には小柱穴がある。埋土からは焼土・瓦とともに梵鐘の鋳型，フイゴの羽口片が出土した。伴出土器からみて鎌倉時代後半の時期と思われる。この土坑は，形態的に通有の土坑と異なることから，梵鐘製作用のものと考え

られる。しかし深さが0.3ｍしかなく，浅い点に問題が残る。ＳＥ432・433は回廊北方にある井戸で，ＳＥ432には瓦質の羽釜が井筒として使用されている。ＳＫ425は回廊基壇上にあるＳＸ079の西から3番目の掘形を壊して掘られた土坑で，少量の土器が出土した。ＳＥ480は西調査区にある円形の石組井戸で，礎石落込み穴によって一部壊されている。井戸底には花崗岩板石が敷かれ，内径0.7ｍ，深さ2.2ｍである。石組みには主に花崗岩玉石が使用され，一部に瓦，塼が転用されている。井戸内からは瓦器，土師器，瓦質の羽釜，備前焼の甕片のほかに竹片が出土した。



SK 440（南から）

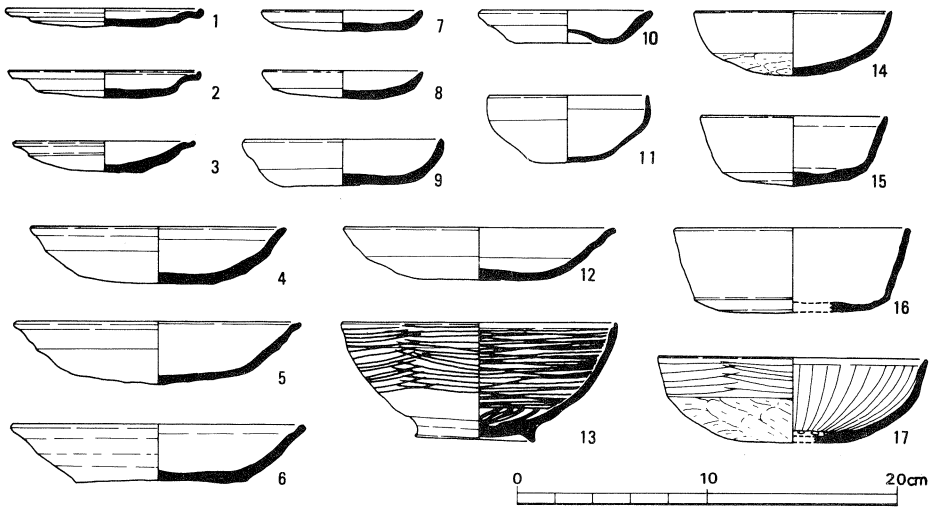
このほかに東西・南北方向の小溝や小柱穴があり，講堂基壇の上では明治時代以降の井戸や土坑が検出された。

出土遺物　瓦塼類，塼仏，土器，金属製品，土製品があるが，さきの第1・2次調査に比べて遺物の出土量は少ない。

瓦塼類には，「山田寺式」の軒丸瓦・軒平瓦・棰先瓦と多量の丸・平瓦がある。このほかに鴟尾，鬼瓦，熨斗瓦などの道具瓦や塼仏が少量ある。また，奈良時代の軒丸瓦6311Ｂや平安時代の変形唐草文軒平瓦，瓦当に「興福□」の文字を表した鎌倉時代の軒平瓦などがある。

「山田寺式」軒丸瓦は，これまでの調査で，Ａ～Ｆの6種が確認されているが，今回の調査では，Ｅ種を除く5種161点が出土した。その出土比率は，Ｄ－Ａ・Ｃ－Ｂ－Ｆの順で，Ｄ種が最も多い。このうちＡ・Ｃ種については，今回の調査地を北の講堂周辺地区と南の回廊・金堂周辺地区に分けてみると，北にＣ種，南にＡ種の多いことがわかる。これまでの調査成果によれば，金堂地区にはＡ種，塔地区にＢ種が多く，堂宇による使い分けがなされた可能性がある。講堂の軒丸瓦については，出土比率の高いＣ・Ｄ種がその候補となろうが，出土数が少ないため断定するまでには至らない。

棰先瓦はすでに明らかにされている5種のうち，Ｃ種を除く4種115点が出



出土土器実測図

土した。しかし，調査区北半の講堂周辺からはほとんど出土しなかったことから，講堂には棰先瓦は使用されなかったと考えられる。軒平瓦は，四重弧文が大半で，わずかに三重弧文を含んでいる。

塼仏は，大・小の独尊像，四尊連座，十二尊連座の四種が明らかになっているが，今回は，四尊連座２点，十二尊連座３点の出土をみただけで，塔・金堂地区に比べて著しく少なく，講堂には塼仏は用いられなかったとみられる。

土器には土師器，須恵器，黒色土器，瓦器および陶磁器がある。山田寺創建期に位置づけられる７世紀代の土器は少なく，11世紀以降のものが出土量の大半を占めている。

上図の14～16はＳＫ454，17はＳＫ430 出土の土器で，いずれも７世紀後半に位置づけられる。１～６の土師器の皿は北面回廊北方にある灰褐色粘質土から出土した。６の底部は「回転糸切り」手法によって切離されている。11世紀前半に位置づけられよう。このほかに，灰褐色粘質土からは二釉・緑釉・灰釉陶器片，黒色土器が出土した。12・13はＳＫ434から出土した土師器の皿と瓦器椀である。瓦器椀の外面は４回に分けて磨かれている。11世紀後半と考えられる。7～9はＳＫ440から出土した土師器の皿である。９の口径は10.4～11.4㎝あり，大皿のタイプとしては小型化している。これらの土師器は大官大寺で検出された井戸ＳＥ411の埋土から出土したもの（概報９）と類似しており，

13世紀末ないし14世紀初頭に位置づけられよう。10・11は井戸ＳＥ480から出土した土師器の皿と瓦器椀である。瓦器椀の口径は8.4㎝あり，内外面の磨きや口径部の沈線はみられない。大和における瓦器椀の終末期のものに近く，14世紀後半から15世紀前半のものと考えられる。

金属製品には金銅製の飾金具や容器の蓋のつまみ，鉄釘がある。蓋のつまみは高さ2.7㎝，最大径2.4㎝の擬宝珠形のものである。井戸ＳＥ433の北方の包含層から11～12世紀の土器とともに出土した。このほかに土製品には円面硯，フイゴの羽口片，梵鐘の鋳型がある。鋳型はＳＫ440から1個体分，約100片出土した。いずれも外型で，笠形や中帯の部分がある。鋳型はスサ入りの粘土を素地とし，その土に真土を塗り，さらに荒真土を塗って仕上げられている。外型の厚さは不明で，現存するものの最大厚は5㎝ある。梵鐘の規模等は判明しないが，製作時期は伴出土器から鎌倉時代後半期と推定される。

まとめ　今回の調査成果には，まず講堂の規模が正面8間であることを確認したことがあげられる。講堂の規模については『諸寺縁起集』に記された「五間四面」の記載から桁行7間と考えられており，その後も7間説あるいは8間説が説かれてきた。しかし，調査によって検出された礎石抜取跡などから山田寺講堂は，飛鳥寺・四天王寺・法隆寺と同じ桁行8間，梁行4間の建物であることが判明した。山田寺の建立の過程は『上宮聖徳法王帝説』裏書によって，比較的よく知ることができ，それによれば金堂は皇極朝，塔は天武朝に竣工した。金堂・塔の竣工時期については出土遺物からも裏付けられるが，講堂竣工時期を明らかにする遺物は出土せず，遺構も検出されていない。しかし『上宮聖徳法王帝説』裏書によれば，講堂本尊と考えられる丈六仏の開眼供養が天武14年（685）に行われていることから，講堂は遅くともその頃には完成していたと考えられる。

北面回廊については第2次調査分を含めて，伽藍中軸線から東へ8間，西へ10間の計18間分を検出したことになるが，隅間を確認するには至らなかった。第1次調査で検出された西面回廊の礎石落込み穴の抜取穴を参考にすると，北面回廊の東西の規模は，隅間を含めて20間ないし22間が考えられる。柱間につ

いては，第２次調査において，礎石抜取跡から梁行を12尺，桁行を13尺等間と考えたが，原位置に残る礎石からみると，梁行・桁行とも12.5尺とみる方が適切である。北側柱列と南側柱列に各々４個ある礎石から柱間を測ると，桁行は3.78ｍ（12.5尺）等間，梁行も同じく12.5尺となる。さらに，東調査区東端の礎石を起点にして，桁行12.5尺で柱間を割付けていくと，伽藍中軸線を狭んだ東西の１間分は，柱間が14尺と広くなる。この広い２間については，門があったと推定されるが，その適否については，北面回廊の規模が判明した後，再検討したい。回廊礎石には金堂の礎石と同様に蓮華座を伴うことが判明した。わが国の古代寺院において，蓮華座を伴う礎石の例は知られておらず，きわめて特異なものと考えられる。また，礎石の蓮華座からみると，回廊の建立時期は金堂の建立時期とそれほどへだたりないものと推定される。

これまでの調査によって，金堂・塔は12世紀のうちに焼失したと推定されたが，講堂・回廊の焼失を示す遺構・遺物は今回は検出されなかった。講堂については，藤原道長が山田寺を訪れた治安３年（扶桑略記）や検校善妙が蘇我倉山田石川麻呂の忌日に法華八講を修した長元７年（多武峯略記）の記録がある。すなわち11世紀前半に講堂は焼失していなかったと推定される。『多武峯略記』には山田寺の伽藍の廃絶した状態が記されており，『玉葉』によれば，薬師三尊像を興福寺の僧が強奪したのが文治３年（1187）とある。いずれにしても，講堂の廃絶期も12世紀後半に求められよう。なお，第１次調査での東面回廊付近の調査によると，東面回廊は10世紀には崩壊したと推定されている。

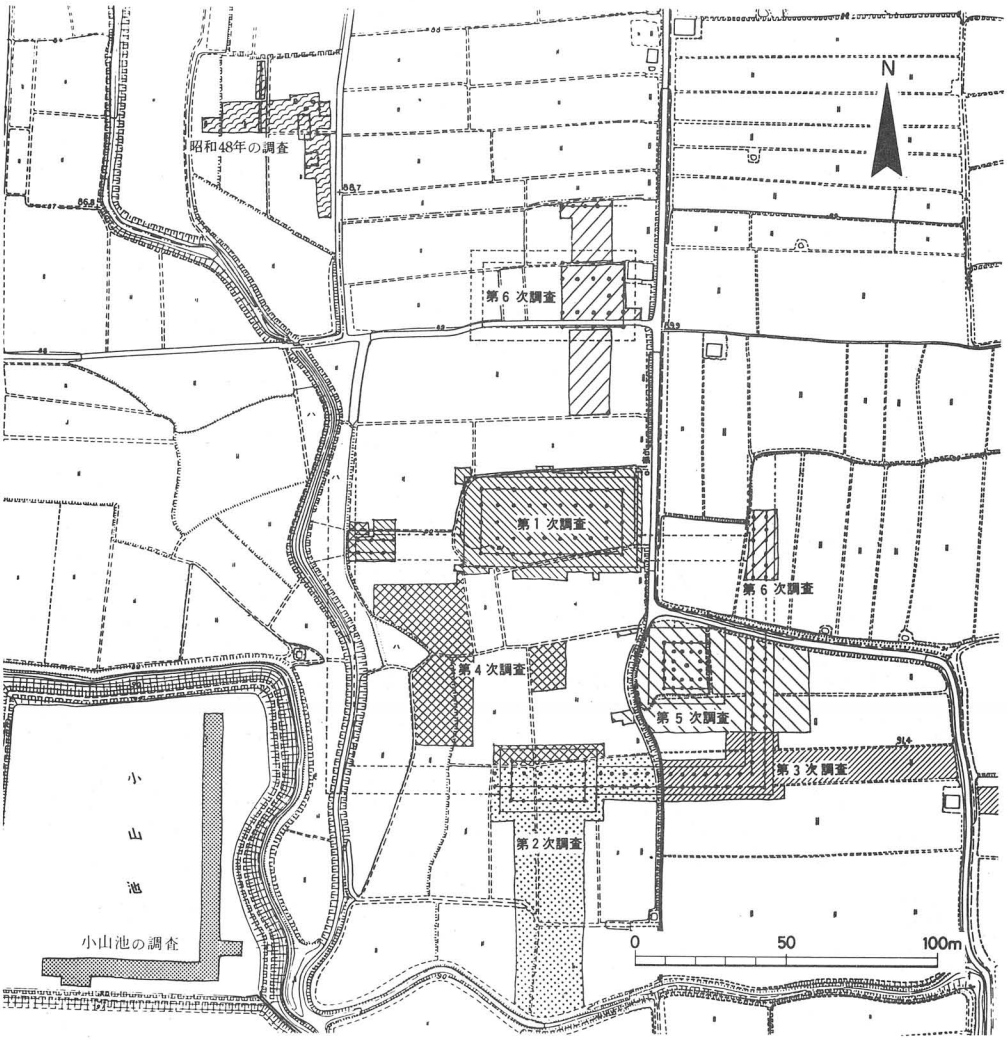
堂塔の基準尺についてみると，金堂が33.3㎝，塔が約30㎝，講堂が29.75㎝，回廊が30.2㎝と各々異なっている。基準尺の相異は各建物の建立時期の差とも考えられるが，その解決については今後の問題として残される。また，伽藍中軸線上での堂塔の心々距離は，塔・金堂間が30.1ｍ，金堂・北面回廊間が26.5ｍ，北面回廊・講堂間が34.9ｍとなる。

山田寺跡の調査は，今回の調査でもって主要部を調査したことになるが，回廊の規模や基準尺など残された問題は多くあり，これらの解決にはまだ今後の継続的な調査が必要であろう。

大官大寺第６次（講堂・東面回廊）の調査

（昭和54年７月～昭和54年11月）

今年度は，講堂と推定してきたＳＢ100の北方地区と東面回廊の一部で調査を行なった。大官大寺の伽藍配置については，従来講堂の前面の東西に塔と金堂を配置する法起寺式あるいは筑紫観世音寺式と考えられてきた。当調査部は昭和49年以来，この見解に基づき，「講堂」，中門，塔，回廊などの調査を行



調査地位置図（１：2500）

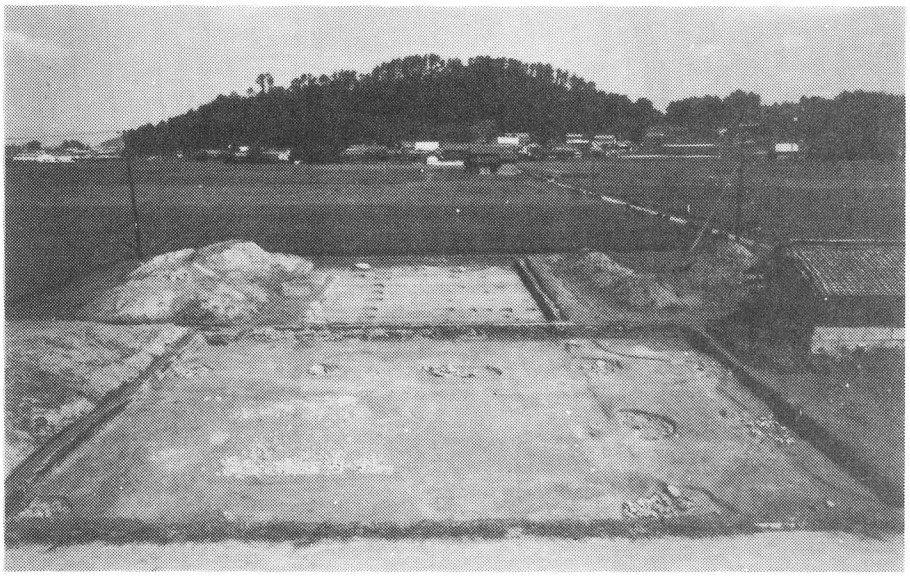
なってきたが，第４次の金堂想定位置の調査において，金堂を発見できなかったため，従来の伽藍配置に関する見解は再検討を迫られ，これまで講堂と考えてきたＳＢ100が金堂である可能性が生じていた。今年度の調査は，この点を明らかにするため，ＳＢ100の北方において講堂の有無を探り，あわせて東面回廊ＳＣ051とＳＢ100から東へのびる北面東回廊との接続部分の状況を明らかにする目的で行なった。

調査の結果，ＳＢ100の北方で新たに大規模な礎石建物ＳＢ500を発見し，東面・北面回廊の接続部を確認するとともに，大官大寺以前の掘立柱建物・塀などを検出した。

大官大寺の遺構

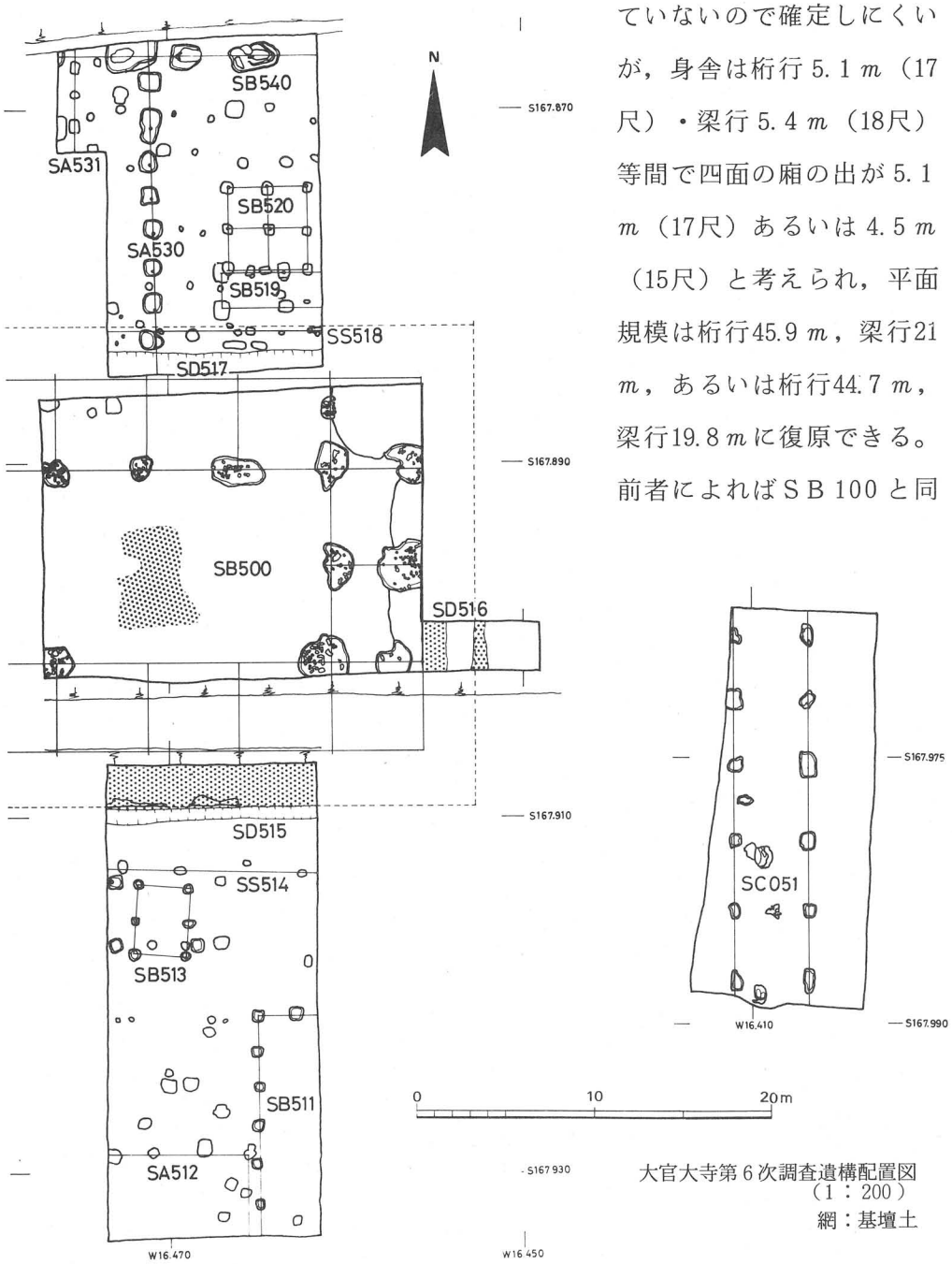
〔講堂ＳＢ500〕　調査区は，ＳＢ100の土壇の北辺から北へ17ｍの地点から，東西13ｍ，南北70ｍの南北に長い調査区を設定し，調査の過程で一部を東西に拡張した。調査区は道路・畦畔によって，北・中央・南区の３区にわかれる。現状は水田で，中央区が，北・南区より15～30㎝ほど高い。

遺構の遺存状況は悪く，基壇は大部分削平され，中央区に建物の東半部の礎石抜取穴10個所（身舎７個所，庇３個所）を検出したにすぎない。抜取穴は，



講堂・北方建物調査区全景（南から）

径1.6～3.0ｍ，深さ10～30㎝の浅い不整形の穴で，中に礎石を割った花崗岩が残っていた。建物は，西半部が未検出で，また南・北入側柱列の抜取穴も確認していないが，抜取穴をもとに，想定伽藍中軸線を軸に西に折り返して，桁行９間・梁行４間の四面廂付きの建物が復原できる。柱間寸法は，礎石が残っていないので確定しにくいが，身舎は桁行5.1ｍ（17尺）・梁行5.4ｍ（18尺）等間で四面の廂の出が5.1ｍ（17尺）あるいは4.5ｍ（15尺）と考えられ，平面規模は桁行45.9ｍ，梁行21ｍ，あるいは桁行44.7ｍ，梁行19.8ｍに復原できる。前者によればＳＢ100と同



大官大寺第６次調査遺構配置図
（1：200）
網：基壇土

一規模となる。ＳＢ500とＳＢ100の建物心々距離は約75ｍである。

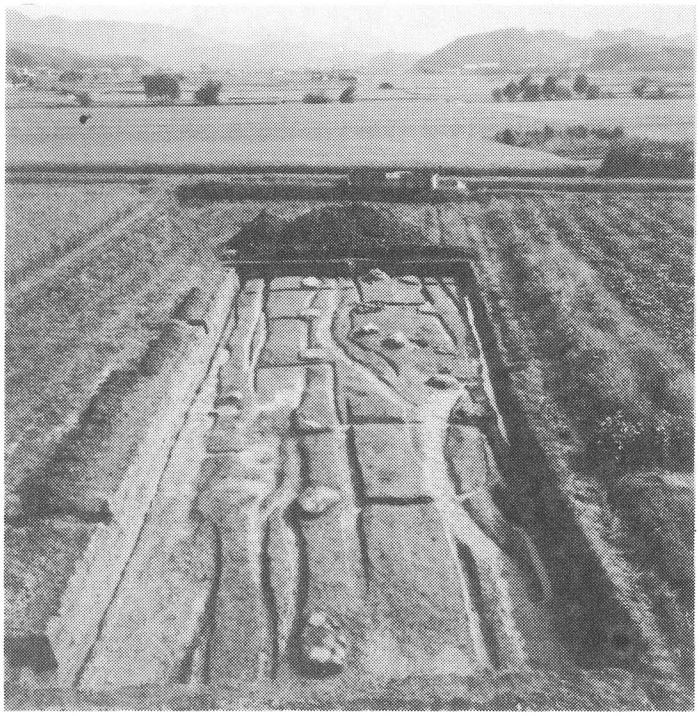
基壇は掘込地業を行っていず，しかも遺存状況が悪く，基壇土が身舎中央部や基壇東縁近辺，南縁近辺に部分的に残っていただけである。基壇土は黄色粘土で，身舎中央部では黄色粘土層と砂礫層が互層になっていた。基壇規模は明確に知りえないが，基壇土の広がりや建物の軒の出からみて，東西52ｍ・南北27ｍほどで，高さは抜取穴と礎石の大きさを考慮して60㎝ほどと推測される。基壇北縁近くに凝灰岩切石を検出した。原位置から移動しており，詳しい用途は明らかでないが，基壇化粧に用いられたものであろう。このほか基壇南縁近くのＳＤ515の北側をはじめとして，基壇周辺には，凝灰岩片の散布がみられるので，基壇は凝灰岩切岩によって化粧されていたと考えられる。なお基壇南縁に東西溝ＳＤ515，東縁に南北溝ＳＤ516が走っているが，いずれもＳＢ500より新しいもので，基壇とは直接関係がない。

基壇の南・北縁近くの東西掘立柱列ＳＳ514，ＳＳ518は，ＳＢ500の造営のための足場である可能性がある。ＳＳ514は径60～80㎝の小柱穴で，東西４間分，ＳＳ518は径30～40㎝の小柱穴で，同じく東西４間分を検出した。

〔ＳＢ540〕　北区北辺に東西棟建物の南側柱列の礎石抜取穴３間分を検出した。西端の抜取穴は調査区に一部かかっているだけであるが，他の３個所は径1.8ｍ～3.0ｍ，深さ15～50㎝の不整形の穴で，西端と２番目の穴には，原位置を動いているが，花崗岩の礎石が，他の２個所には礎石を割った花崗岩片が残っていた。西端から２番目の礎石は1.4ｍ×0.7ｍの花崗岩自然石で，回廊礎石の一般的な大きさと共通している。柱列はＳＢ500の建物から北29ｍの位置にあり，柱間寸法は3.9ｍ（13尺）である。

〔東面回廊ＳＣ051〕　東面回廊ＳＣ051は，これまで第３・５次調査によって，南端から11間分を検出している。今回は，第１次調査で確認したＳＢ100から東へのびる北面東回廊と東面回廊との接続部を確認するため，東西10ｍ，南北22ｍの調査区（東区）を設定した。５間分の礎石12個所を検出した。礎石は一辺70～130㎝の花崗岩ですべて原位置を留め，平坦面を上部に長軸を棟方向に揃えて据えられており，柱座などの造り出しをもたない。柱間寸法は梁行4.

2 m（14尺），桁行は中央の1間が4.2 m（14尺），ほかの4間が3.9 m（13尺）である。基壇は中世以降の溝などによって著しく破壊されており，基壇幅は確認できなかった。遺存する基壇土は黄色粘土と灰色砂質土の互層で，黄色粘土の上層には焼土や焼土を含む焼瓦層が堆積し，焼亡していることが知られた。以上の調査結果は第3・5次調査と同じである。北面東回廊の東への延長は，検出した5間のうちの中央間を通るが，その柱間寸法が14尺で他の柱間と異なり，北面回廊の梁間に一致することから，北面回廊がこの中央間で東面回廊に接続することが明らかとなった。東面回廊が北面回廊よりさらに北へのびていることは注目される。



東面回廊SC 051（北から）

その他の遺構

北・南区において，4棟の掘立柱建物，3条の掘立柱塀や溝を検出した。

SB 511は，南区東南隅に検出した梁行1間以上，桁行5間以上の南北棟建物で，柱間寸法は梁・桁行とも2.1 m（7尺）である。SA 512はSB 511の西にあり，東西3間，南北1間分を検出した。掘立柱塀あるいは建物であろう。柱穴掘形の形状が一定せず，柱間寸法も2.2～2.8 mと不揃いである。SB 513は，南区のSB 500の南にある梁行1間，桁行2間の南北棟建物で，柱間寸法は梁行2.8 m，桁行1.9 mほどである。SB 519は北区のSB 500の北にある梁行1間，桁行1間以上の東西棟建物で東の調査区外へのびるとみられる。

柱間寸法は梁行1.8 m，桁行3.6 mである。ＳＢ520は，ＳＢ519の北にある２間×２間の総柱の建物で，柱間寸法は2.1～2.3 mである。柱穴の切合い関係からみてＳＢ519より新しい。ＳＡ530は北区西辺にある掘立柱南北塀で，6間分を検出した。柱間は不揃いで2.0～2.1 m。ＳＢ520・ＳＡ530の柱穴掘形から飛鳥Ⅳ型式（当研究所学報第31冊）の土師器・須恵器が出土した。以上のうち，ＳＢ519・520，ＳＡ530が出土遺物や柱穴の切合い関係から大官大寺以前の遺構であることが明らかである。このほか掘立柱穴を多数検出しているが，建物としてまとまらない。検出した溝は大部分中世以降の新しい時期であるが，北区南辺に検出した素掘りの東西溝ＳＤ517は，古い時期のもので藤原京の想定九条大路北側溝近くに位置するので，九条大路北側溝である可能性がある。南岸を検出していないが，幅１m以上，深さ20cmである。

遺　物

瓦は調査区全体から出土しているが，特にＳＢ500の基壇の南・北辺，東面回廊から多量に出土した。そのほとんどが二次的加熱をうけ小片となっている。軒丸は大部分が軒丸瓦6231－軒平瓦6661の大官大寺式であるが，川原寺式軒丸瓦２点と慈光寺式鬼面文軒丸瓦１点も出土している。

ＳＢ500を検出した北・中央・南区では出土軒丸瓦84点中，6231Ａが89％，軒平瓦72点中6661Ａが56％を占め，6231Ａ－6661Ａの組み合わせが，ＳＢ500の所用軒瓦と考えられる。これまでの調査によって，各堂宇の所用軒瓦についてＳＢ100が6231Ａ－6661Ａ，塔が6231Ｃ－6661Ｂ，中門・回廊が6231Ｂ・Ｃ－6661Ｂの組合せが確認されており，さらにＳＢ100所用軒瓦と塔・中門・回廊所用軒瓦との間には，文様とともに胎土・焼成・製作技法などにも相違があり，各堂宇の建立の時期差ともあわせて前者が後者より早い時期のものであることが明らかとなっている。ところで，今回明らかになったＳＢ500所用軒瓦は，ＳＢ100所用軒瓦と同笵であるが，胎土・焼成・製作技法の点で異なり，かえって塔・中門・回廊所用軒瓦と類似している。

東西回廊を検出した東区では，軒丸瓦３点，軒平瓦52点が出土し，軒平瓦では6661Ｂが85％を占める。軒平瓦にくらべ軒丸瓦の出土点数が少い点や，6661

Ｂが回廊所用軒瓦と考えられる点は，これまでの調査結果と同じである。

む す び

第４次調査以来，疑問の生じていた大官大寺の伽藍配置の問題は，今回の調査によって一応の解決をみるに至った。はじめに述べたように，大官大寺の伽藍配置を法起寺式あるいは筑紫観世音式とみる見解は，第４次の金堂想定位置の調査で金堂が発見できなかったことによって否定され，これまで講堂と考えたＳＢ100が金堂である可能性が生じていたが，今回ＳＢ500を発見することによって，ＳＢ100を金堂，ＳＢ500を講堂と考えるに至ったのである。ここで伽藍配置の問題について整理しておく。

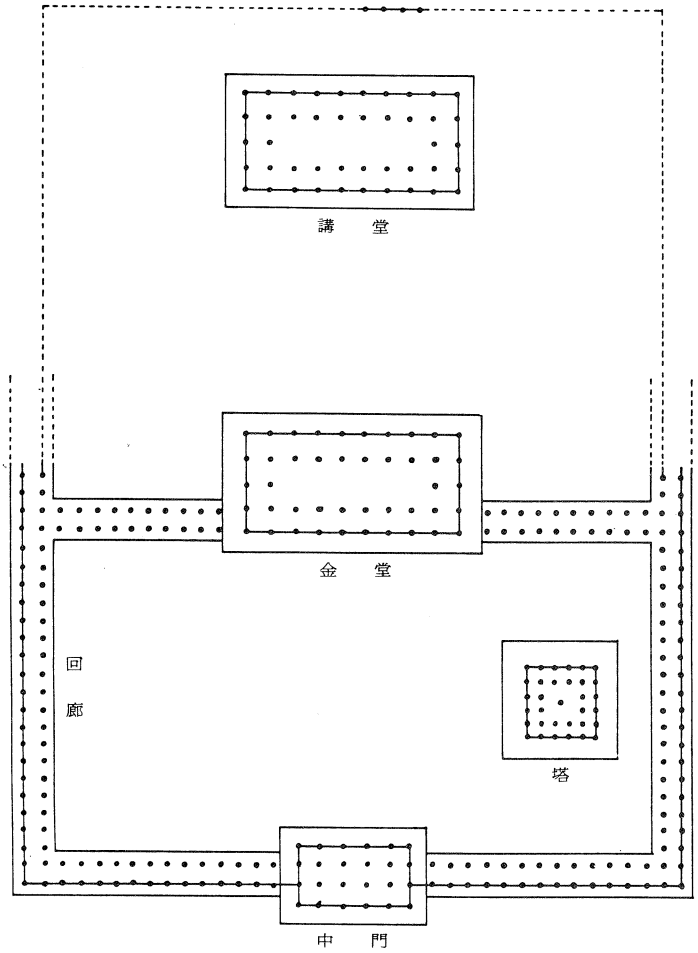
ＳＢ100が伽藍中軸線上の中門を入った正面に位置し，ＳＢ500と並ぶ最大規模の建物であることからみて，これを金堂にあてることには異論があるまい。その基壇が他の堂宇と比べて格段に丁寧な版築によって構築されていることや，ＳＢ100が伽藍中心部で最も早く建立されていることも（概報８），この考えを支持する。これまでの調査によれば，大官大寺の遺構はいずれも「扶桑略記」の和銅四年大官大寺災上の記事に当ると推定される火災によって焼亡しており，遺構の状況や所用軒瓦から焼亡時にＳＢ100は竣工していたが，塔ＳＢ200や，中門ＳＢ400，回廊は未だ基壇化粧が施されていず，就中，塔は建物が完成していたが，中門は足場を組んだまま焼亡していることが明らかになっている。今回発見したＳＢ500は，凝灰岩切石による基壇化粧が施されていたと推定され，その造営は塔・中門より先行していたことが明らかで，おそらくＳＢ100に引き続いて造営されたものと思われる。

ＳＢ500は，伽藍中軸線上で金堂ＳＢ100背後に位置し，ＳＢ100と並ぶ大規模な建物であることからみて講堂とみるのが妥当であろう。

またＳＢ500の北方に新たに発見したＳＢ540については，建物の一部を検出しているだけなので，その性格を決めることは困難であるが，あえていえば柱間寸法が回廊の桁行柱間の13尺と同じことや，東面回廊が金堂からのびる北面回廊よりさらに北へのびていることから，講堂一郭を囲む北面回廊，あるいは川原寺や大安寺の僧房のように，前面廂を吹きぬけとし回廊と接続する僧房

の可能性が考えられる。柱間が狭いので食堂とは考えにくい。今後の調査の進展に期待したい。

こうして大官大寺の伽藍配置は，中門・金堂・講堂を中軸線に並べ，中門と金堂を回廊でつなぎ，その回廊内の西部を空地として，東部に塔を配する配置であることが明らかとなった。この伽藍配置は，回廊内西半部が空地になっている点が特異である。すでに「概報９」が示唆しているように，この点とそれに加えて大官大寺が造営途中で焼亡していることから，この配置が果して造営当初からの計画であるかが問題となり，造営当初，回廊内西部にも何らかの建物の造営が計画されていたが，造営着手に至らず焼亡したという可能性も否定できない。同時期の本薬師寺や大官大寺の後身である大安寺が東西両塔の双塔形式の配置であることから，大官大寺も当初の基本計画としては東西両塔を配する伽藍配置であったとも考えられる。この問題は簡単に解決できるものではないので，古代寺院の伽藍配置の変遷の問題も含めて，今後さらに検討を加えていくこととしたい。



大官大寺伽藍復原図

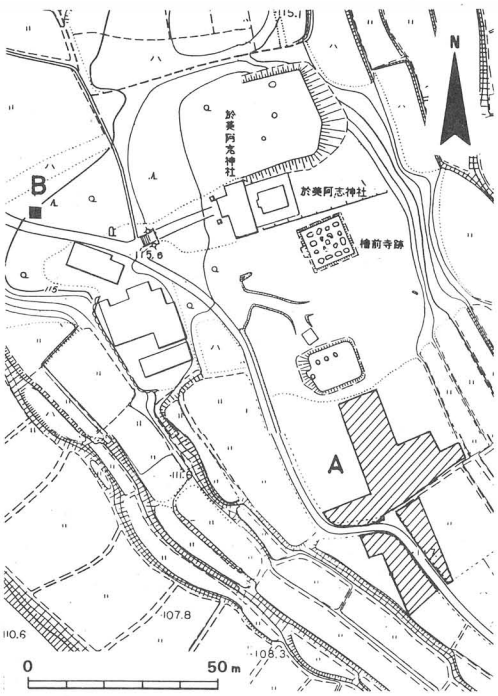
桧隈寺第１次の調査

（昭和54年７月～昭和54年９月）

この調査は明日香村の依頼をうけ，当研究所の飛鳥地域における寺院調査の一環として実施したもので，今回はその初年度にあたる。桧隈寺は東南から西北にのびる丘陵にあり，現在は於美阿志神社の境内になっている。その遺構には神社境内の北端に講堂と推定される土壇が，南東に重要文化財の十三重石塔の立つ塔跡が，南端には中門と推定される高い土壇が残っている。今回の調査は南門の検出を主目標とし，中門推定地の南に調査地を設定した。

なお，今回の調査では講堂西方において便所建設に伴う小規模な事前調査を行なっており，合わせて報告する。

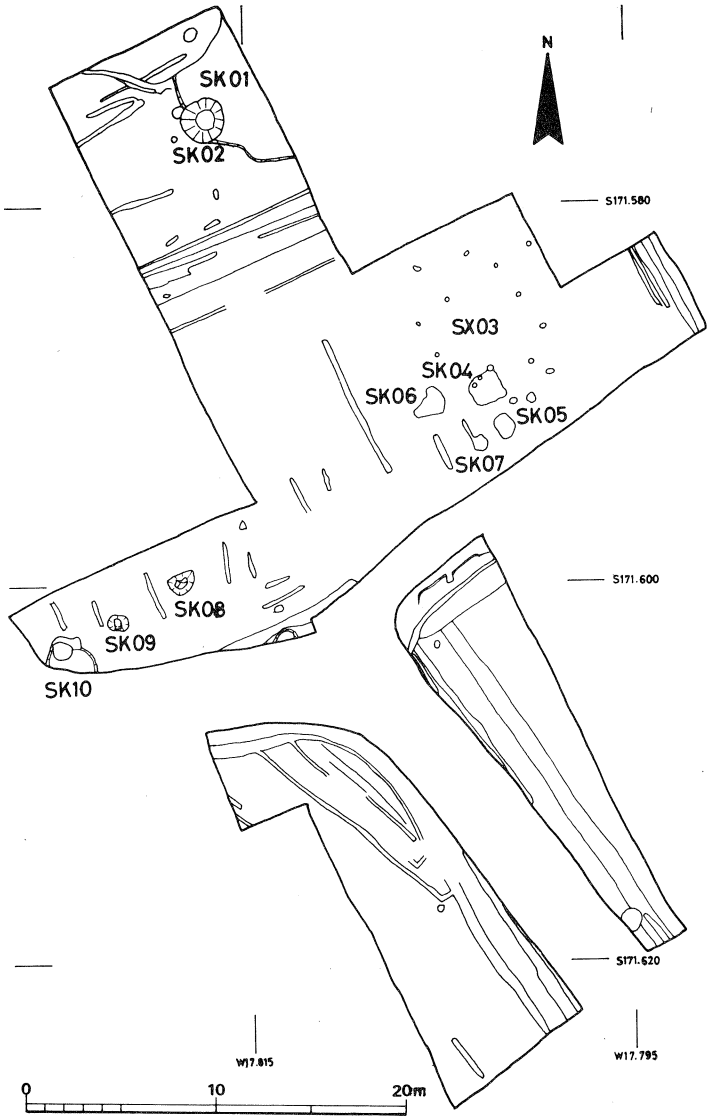
南門地区　調査地は東西の畦畔で北区・南区に分かれる。両区とも床土の下は直接地山となるところが多い。地山は白灰色粘土が斑状に入った黄褐色粘土や花崗岩の霜爛した赤褐色砂質土である。北区東南よりでは地山との間に厚さ20㎝内外の整地土層が認められた。遺構の大半は地山面で検出した。



調査地位置図（1：2000）　A 南門地区　B 講堂西方地区

主な遺構は北区で検出した土坑・ピット群があるが，南区ではみるべきものはない。ＳＫ01は北区北端で検出した瓦溜で，なお東へひろがる。大量の瓦に12世紀代の瓦器が混在している。ＳＫ02はＳＫ01の下から検出した円形の土坑である。上面の径2.2ｍ，底径１ｍ，深さ1.1ｍである。内壁および底面に厚さ５㎝の褐色粘土を貼り，一部に平瓦をはりつけている。埋土は黄

褐色粘土と瓦片を互層に固くしめた状況で，埋土上部に12世紀の瓦器を含む。この土坑の性格は不明である。ピット群ＳＸ03は北区東南部で検出したもので，塀や建物の形状をなすものの，まとまりが明確でない。ピット埋土には瓦器が混じる。この近くの浅い土坑ＳＫ04～07も同様に埋土に瓦器が含まれている。ＳＸ03は地山面で検出したが，その一部は整地土に覆われていた。整地土は暗褐色粘質土・暗紫色粘質土で全体に瓦・瓦器片を含み，一部に瓦片が塊状に集積したところや，礎石か基壇化粧材と思われる花崗岩・凝灰岩断片が混じる箇



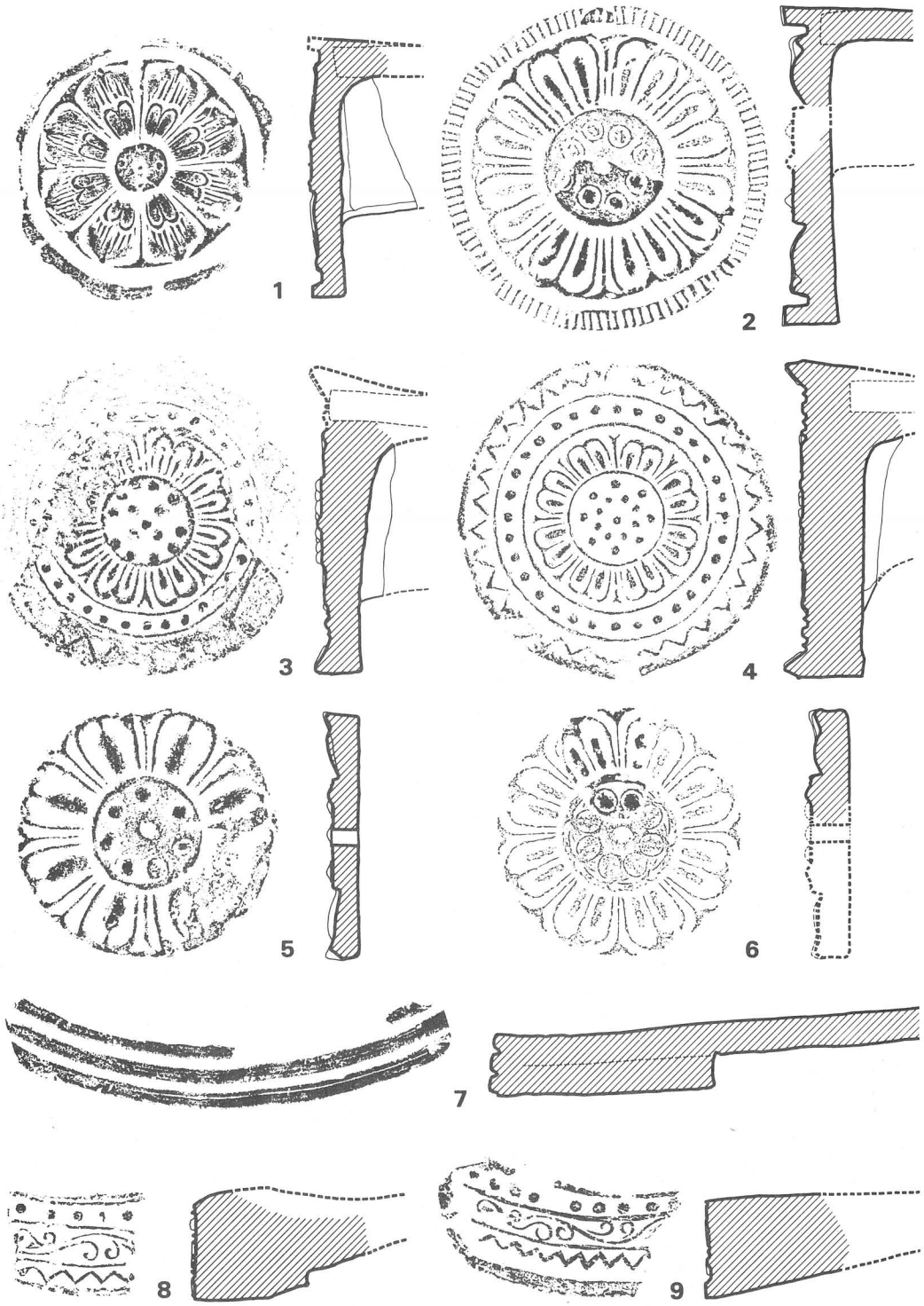
桧隈寺　第１次調査
遺構配置図（1：400）

所もあった。SK08・09は北区西南部で検出した礎石を落としこんだ土坑である。埋土には瓦・瓦器片を含んでいる。礎石は上面を平坦にしただけの不整形なもので，造り出しはない。ともに黒色斑入りの花崗岩製で風化が著しい。大きさはSK08出土の礎石でみると上面が0.4 m × 0.6 m，高さ0.6 m，SK09出土のものもほぼ同じである。SK10は北区西南隅の大土坑である。なお南へひろがる。埋土に染付陶器を含む。以上のほか発掘区全域に種々の方向をもつ小溝を多数検出している。中世を上限とし，かなり新しい時期のものまである。なお，北区北端部には中門基壇の基礎地業の一部がかかることも予想されたが，掘込地業などはみられなかった。

講堂西方地区　調査地は講堂西方40 mの所で中世以降その存在が知られる道興寺跡と伝えられる場所である。9 ㎡を発掘し，基壇土と思われる褐色粘土層を確認した。この粘土層は厚さ45 cmで，その下は地山になる。発掘区内では礎石・根石等はみられなかった。表土および粘土層の上部の撹乱層から出土した多量の瓦には注目すべきものがある。

出土遺物　出土遺物には瓦・土器・鉄釘等があるが，ここでは瓦について紹介する。瓦は表土，水田床土，整地土層，土坑などから出土し，直接使用建物との関連でとらえられるものはない。瓦は北区ではひろく全域に散布し，北端・東南部に多く，とくに北端部に著しい。南区では瓦は殆んど出土しない。出土した瓦には軒丸瓦・軒平瓦・棰先瓦・鴟尾および丸・平瓦がある。

軒丸瓦には3型式7種19点ある。I型式(1)〔52Pの図の1，以下同じ〕は素縁素弁八弁蓮華文で，弁端が反転し珠文状をなす。花弁中に，連接する複子葉と左右4条ずつ楔形の火焔を線で表わす。小さな中房に1＋4の小蓮子を配する。2点出土。II型式は複弁八弁蓮華文で，3種ある。A・Bは細い直立縁に輻線文を表したもので，「桧隈寺式」と称されるもの。A（2）とBは子葉の盛りあがりが異なり，Bの類例（奈良国立博物館『飛鳥白鳳の古瓦』の291）によれば中房の高さや蓮子の配置が異なるものの，間弁が花弁に接する点などは良く似ている。Cは複弁の小片が出土しただけであるが，類例（前掲書の231）によれば，周縁は粗い線鋸歯文を表した傾斜縁となる。A 7点，B 2点，C 1



桧隈寺出土軒瓦実測図（1：4）

点出土。Ⅲ型式は藤原宮式に類似した複弁八弁蓮華文で，１＋８＋８の蓮子を配するＡ（４）と１＋４＋12の蓮子を配するＢ（３），さらに中房がやや小ぶりなＣがある。Ａはこれまでによく知られている6275－Ｇ型式で６点，Ｂ，Ｃは各１点出土。

軒平瓦は三重弧文と扁行唐草文の２型式４種11点ある。三重弧文には胎土の特徴から軒丸瓦Ⅱ－Ａ・Ｂと組みあうとみられるもの（７）とそうでないものがある。前者５点，後者７点出土。扁行唐草文は右行するもので，唐草文の表現が異なる２種があり，（８）は幅広の段顎，（９）は無顎である。前者５点，後者５点出土。奈良県教育委員会による塔跡の調査『重要文化財於美阿志神社石塔婆修理工事報告書』では（８）の文様で無顎のものが出土している。

棰先瓦は８点あり，単弁八弁（５）と複弁（６）の２種がある。（５）は比較的大きな中房に円圏をもつ大粒蓮子７個を配し，間弁先端は花弁に接している。11点出土。（６）は小片であるが，軒丸瓦Ⅱ－Ｃに似た複弁で中房には円圏つきの大粒蓮子を一重めぐらす。１点出土。鴟尾は側面の半円形透し付近の小片１点が出土した。表面に突出した羽形文様が表わされている。なお，文字瓦が２点あり，ともに平瓦凸面に下□，□卌二長□ とヘラ書きしている。（１），（８），（９）が講堂西方地区出土，ほかは南門地区出土である。（１），（２），（３），（６），（９）などは今回新たに知られたものである。大量の丸・平瓦は凸面縄叩きのものが多くみられ，凸面格子叩きのものが少量あった。

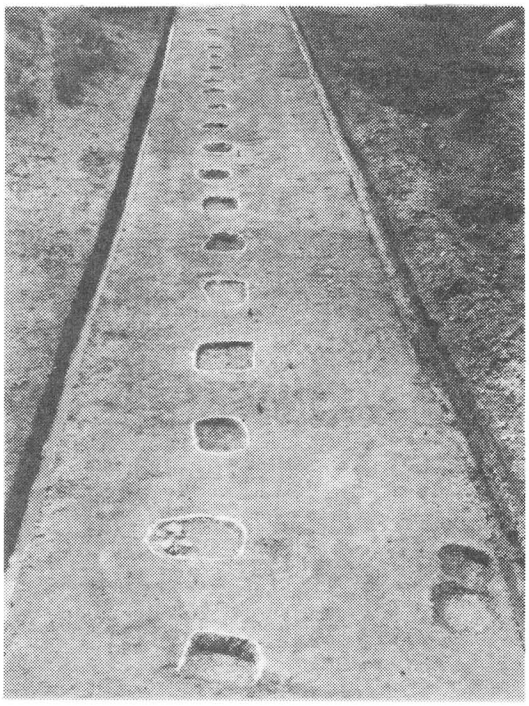
まとめ　今回の調査で主眼とした南門の遺構は確認できず，検出した遺構は中世以降に限られ，古代に遡るものは皆無であった。しかし，北区西南部分の落としこまれた礎石の存在，北区東南部での礎石・基壇化粧材と思われる花崗岩・凝灰岩片の出土，瓦の出土状況などからみて，北区に何らかの建物が存在したことは推定できる。さらに，北区のうちでも南半中央部，すなわち中門土壇の南30*m*前後付近は，北区で最も遺構の稀薄なところであり，そのあたりに，ある時期まで土壇が残存していたことを想定することが可能である。境内に残る基壇の高さに比べて，境内南方の地域はかなりレベルが低いことからみて，この一帯が後世大きく削平されていることも上記の推測をたすけよう。

小　山　池　の　調　査

（昭和54年８月～昭和54年９月）

この調査は，小山池の埋立開田工事に先だって実施したものである。小山池は明治初年頃に造られた灌漑池で，掘削や浚渫作業に伴って瓦片や礎石の出土が伝えられており，大官大寺ないし飛鳥岡本宮に関連する遺構の存在が予想されたのである。このため調査では，遺構遺存の可能性や，上記遺跡の中心により近くすることを考慮して，堤防東辺と南辺に沿い逆Ｌ字形の調査区を設定した。調査の結果，掘立柱塀１，溝２，土坑７を検出した。これらの遺構は，池底堆積土直下（部分的には暗灰色粘土層が入いる）の褐色砂礫地山層上面で検出したものであり，時期的には弥生時代と７・８世紀代とに大別できる。

７・８世紀の遺構には，掘立柱塀１，溝１，土坑４がある。ＳＡ2700は，東調査区で検出した南北方向の掘立柱塀であり，20間分，総長44ｍを確認した。柱穴は上部を削平されていて，深さ0.2～0.4ｍを留めているにすぎないが，柱間寸法2.1～2.3ｍに復原できた。ＳＡ2700の延長部分は，南が池底の掘削，北がＳＤ2701の削平をうけともに不明瞭となり判然としない。ＳＤ2701は，東発掘区の北端で検出した幅28ｍ以上の流路であり，深さ１ｍ以上におよぶ。大官大寺所用軒平瓦（6661Ｂ）や６～８世紀初頭の土器片が出土した。ＳＫ2708～2713は，南調査区西半で検出した土坑群である。いずれも長辺3.5ｍ，短辺2.5ｍ前後の長方形平面をもっ

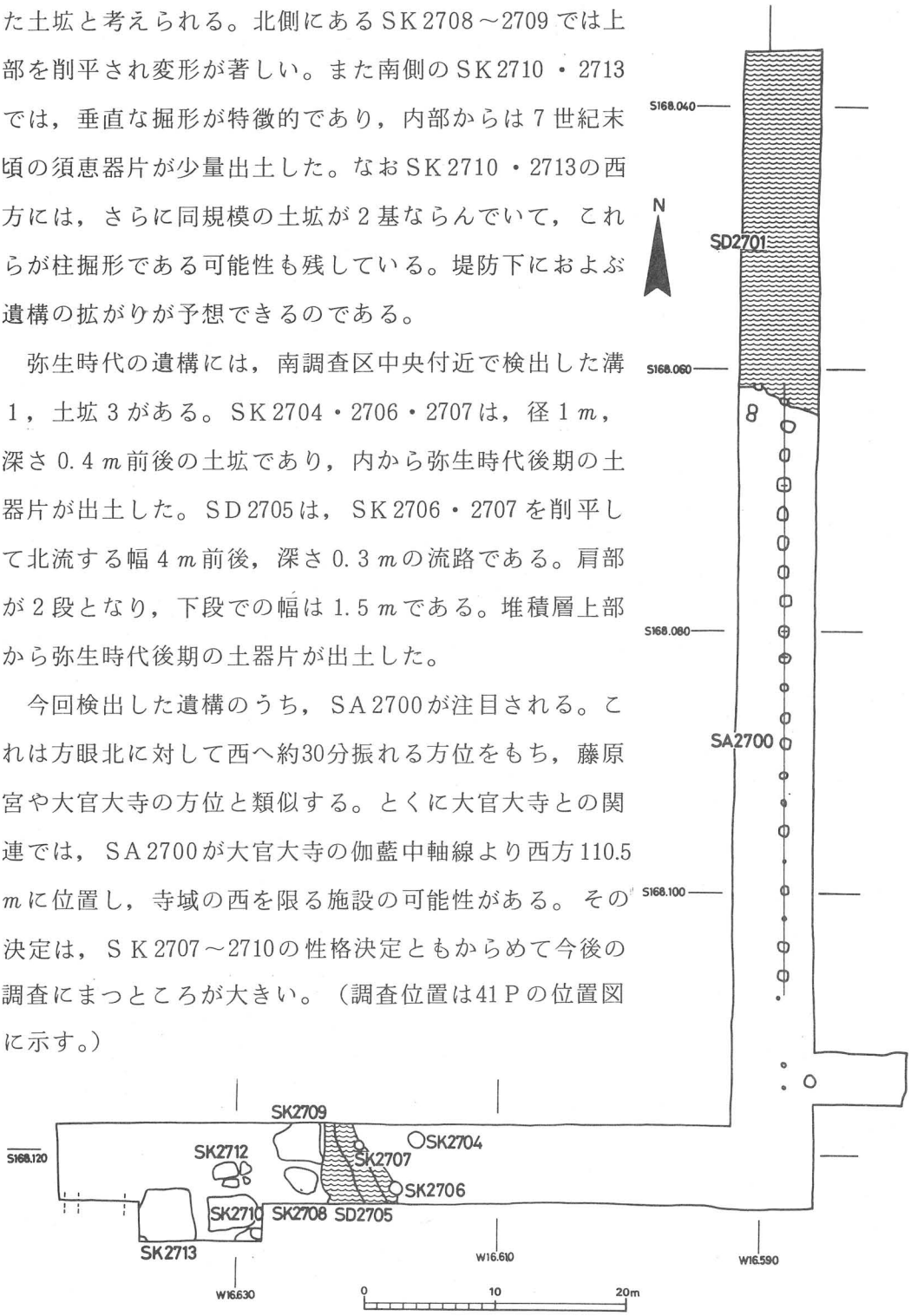


ＳＡ 2700（北から）

た土坑と考えられる。北側にあるSK2708～2709では上部を削平され変形が著しい。また南側のSK2710・2713では，垂直な掘形が特徴的であり，内部からは7世紀末頃の須恵器片が少量出土した。なおSK2710・2713の西方には，さらに同規模の土坑が2基ならんでいて，これらが柱掘形である可能性も残している。堤防下におよぶ遺構の拡がりが予想できるのである。

弥生時代の遺構には，南調査区中央付近で検出した溝1，土坑3がある。SK2704・2706・2707は，径1m，深さ0.4m前後の土坑であり，内から弥生時代後期の土器片が出土した。SD2705は，SK2706・2707を削平して北流する幅4m前後，深さ0.3mの流路である。肩部が2段となり，下段での幅は1.5mである。堆積層上部から弥生時代後期の土器片が出土した。

今回検出した遺構のうち，SA2700が注目される。これは方眼北に対して西へ約30分振れる方位をもち，藤原宮や大官大寺の方位と類似する。とくに大官大寺との関連では，SA2700が大官大寺の伽藍中軸線より西方110.5mに位置し，寺域の西を限る施設の可能性がある。その決定は，SK2707～2710の性格決定ともからめて今後の調査にまつところが大きい。（調査位置は41Pの位置図に示す。）



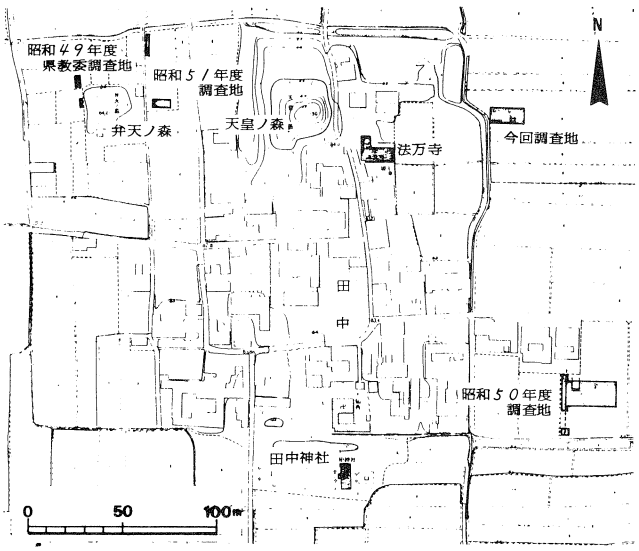
小山池調査遺構配置図（1：500）

田中宮推定地の調査

（昭和54年10月）

この調査は，幼稚園建設工事に伴って実施したものである。調査地は，田中廃寺あるいは田中宮跡とも想定されている「法万寺」の東側約80ｍに位置し，調査直前までは水田であった。調査では，東西に長い幼稚園敷地の西端に東西約20ｍ，南北約８ｍの発掘区を設定した。調査地の基本的な層序は，上から，耕土・床土・暗灰色土・暗灰色砂質土・黄褐色粘質土の順であり，遺構は黄褐色粘質土上面で検出した。調査によって検出した遺構には，井戸１基と東西・南北方向に走る小溝多数，および小穴若干数がある。このうち井戸以外の遺構は，いずれも中世以降のものである。井戸は，調査区の東南部分で検出した。径１ｍ・深さ1.4ｍの円形の掘形をもち，井戸枠は認められなかった。井戸底部より，７世紀前半頃とみられる須恵器平瓶１点が出土したから，時期的に田中宮との関連を推測させる遺構であるが，詳細は不明である。

田中宮に関連した発掘調査は，これまで数回にわたって実施されているが，（地図参照）その所在なりを知る遺構の確認はない。ただ，昭和50年度の調査では，30ｍ余にわたる南北方向の掘立柱塀と桁行３間以上・梁行２間の掘立柱建物が検出されていて，一定の成果はみられる。しかしながら，これらの調査はいずれも発掘面積が狭小で，検出遺構の性格すら考え難い欠点をもっている。今後広範囲にわたる調査が期待されるのである。



田中宮推定地周辺地形図（１：4000）

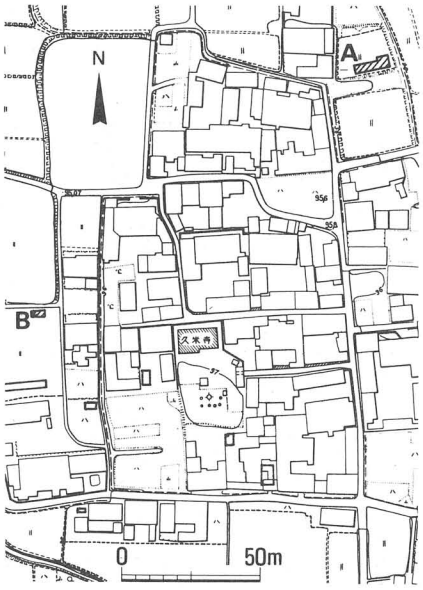
奥山久米寺の調査

（A 昭和54年4月～昭和54年5月）
（B 昭和54年9月～昭和54年10月）

本年度は家屋新築に伴う2件の小規模な調査をおこなった。A調査地は塔跡の東北方130 m，B調査地は同じく西北方70mである。いずれも寺域あるいは隣接地に推定している個所である。

A調査地

南北に細長くのびる微丘陵上の東縁に位置し，99㎡の範囲について調査した。水田耕作土下の層序は床土，瓦片および瓦器を含む灰褐色土整地層，バラス混り砂質地山となり，地山面は東に向かって緩く下降する。検出した遺構のほとんどが近世の遺物を伴う土坑などで，あきらかに奥山久米寺と関連する遺構はなかった。ただ，調査区の東端近くに，根石とみられる大小の川原石が詰った掘形状のピットが3個あった。各間寸法は南北4 m，東西2.3 mであるが，建物としてまとまらないこと，方位が大きく振れることなどから直ちに寺との関係を言及できない。なお出土遺物には7世紀の土師器・須恵器が少量あり，そのほかに瓦がある。瓦のうちには重弧文軒平瓦や，角端点珠形式素弁蓮華文軒丸瓦で8弁のものと11弁のものがそれぞれ1点出土している。



調査地位置図

B調査地

昭和51年度に奥山久米寺の西方で確認した奈良時代以前の南北大溝（概報7）の北延長上にあたり，大溝の東岸に近接することから，これに関連する遺構の存在が予想された。しかしわずか15㎡の小面積の調査であったために斜行する細溝2条を検出したにとどまった。

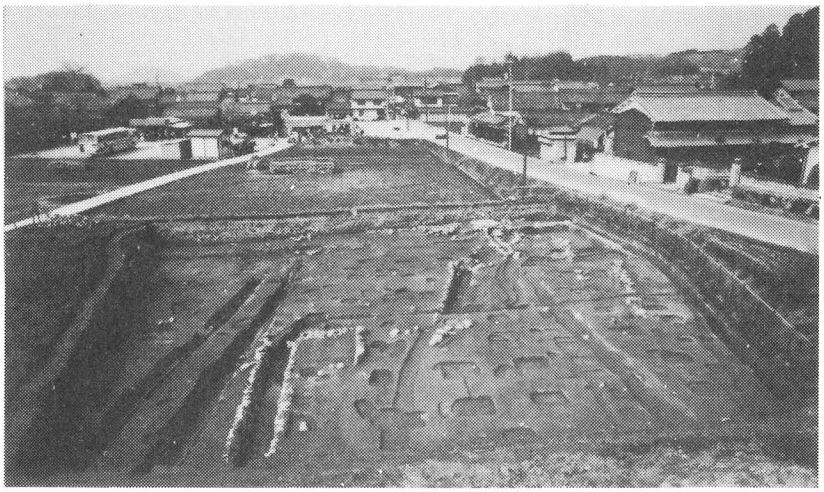
飛鳥寺東南部の調査

（昭和54年１月～昭和54年４月）

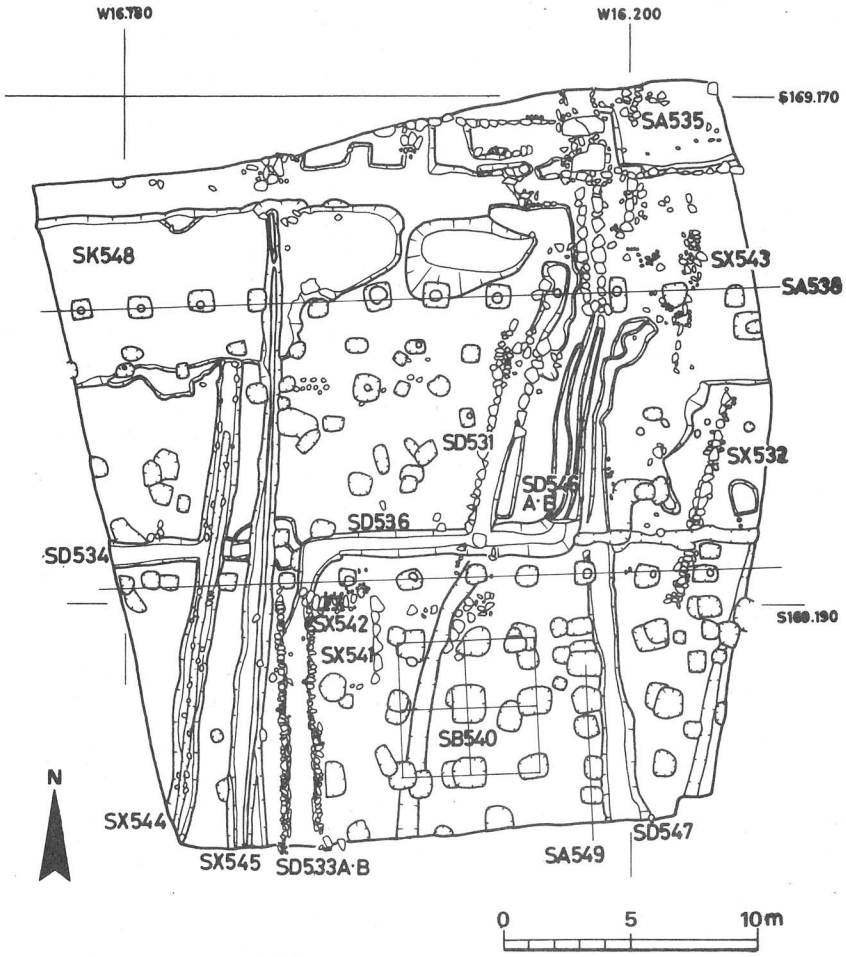
飛鳥寺東南部の調査については，中間報告ではあるが，すでに概要報告がある（『飛鳥藤原宮発掘調査概報』９，昭和54年）。その後検討した結果，各遺構の所属時期が確定し，また，遺構番号も決まったので，改めてここで一覧表にまとめておく。以下，昨年度の概報と若干異なる点とそれから派生する問題等も含め，少し補足しておくことにする。

築地ＳＡ535は，８世紀初頭に改造を受けていて，現状では，当初のものは残っていないが，飛鳥寺創建時の位置をそのまま踏襲した可能性が強い。また，すでに確認されている西門と西面築地を，伽藍中軸線で折り返すと，南面築地は発掘区内で曲り東面築地となることになるが，今回の調査では，さらに東へのびることが明らかとなった。その結果，東面回廊と東面築地との間には，かなりの空閑地ができることになり，そこに建物の存在が予想される。

最後に出土遺物について記しておく。出土した主な遺物は，土器・瓦である。土器には緑釉陶器片が１点あり，瓦には，軒丸瓦（130点），軒平瓦（８点），丸瓦，平瓦がある。瓦では飛鳥寺最古の桜花形軒丸瓦の多さが注目される。



調査地全景（南から）



飛鳥寺東南部調査遺構配置図（1：300）

検出遺構一覧表

Ⅰ期	SD 531	斜行石組溝	Ⅱ期	SX 541	南北玉石列
	SX 532	斜行石列		SX 542	盲暗渠状施設
	SD 533A	南北石組溝		SX 544	南北溝
	SD 534	東西溝		SX 545	木樋
	SX 543	斜行石列		SD 546A	南北溝
Ⅱ期	SD 533B	南北石組溝		SA 549	南北掘立柱塀　2間分
	SD 536	東西溝	Ⅲ期	SA 535	南面築地
	SA 538	東西掘立柱塀　11間分		SD 546B	南北溝
	SA 539	東西掘立柱塀　10間分		SD 547	南北溝
	SB 540	掘立柱建物　2間×2間	Ⅳ期	SK 548	土坑

期は7世紀前半・Ⅱ期は7世紀後半・Ⅲ期は7世紀末～8世紀初・Ⅳ期は11世紀

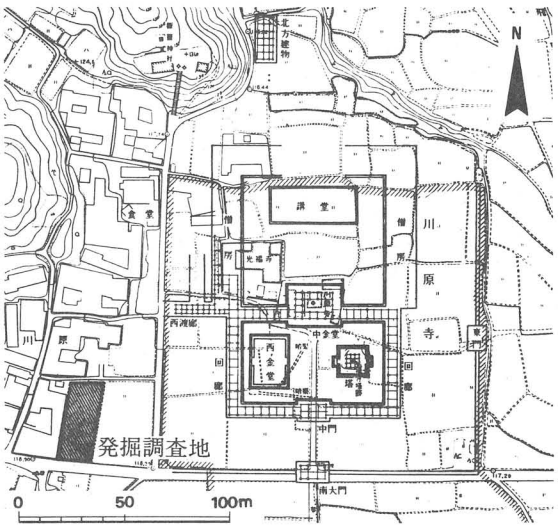
川原寺西南部の調査

（昭和54年７月～昭和54年８月）
（昭和54年12月）

この調査は，史跡川原寺跡の現状変更申請に伴う事前調査として実施した。調査地は川原寺の寺域西南部に位置し，伽藍復原整備地の西に近接した水田である。調査は南北に長い水田を南半と北半の２回に分けて行ない，全体として499㎡を調査した。調査地の基本的な土層は，上から耕土・床土・茶褐色土の順であり，調査区西半部では地表下0.4ｍの花崗岩霜爛土（地山）上面において遺構を検出した。調査区の東半部には沼状の落込みがあり，地表下1.4ｍの花崗岩霜爛土上に暗灰褐色粘土，青灰色粘土が厚く堆積する。また調査区北西部には整地土がみられた。

検出した遺構には，掘立柱建物２，土坑３，斜行大溝１，掘立柱塀１，井戸２のほか沼の西岸，南北細溝などがある。遺構は，その重複関係と伴出する遺物から４期に分かれる。

Ⅰ期の遺構には東西掘立柱塀ＳＡ01がある。柱穴は一辺0.6ｍの方形掘形をもち，底部に柱根が残る。１間分3.0ｍを検出したにとどまるが，調査区域外西方に延びる可能性が強い。西側柱穴はⅡ期の斜行大溝に切られている。

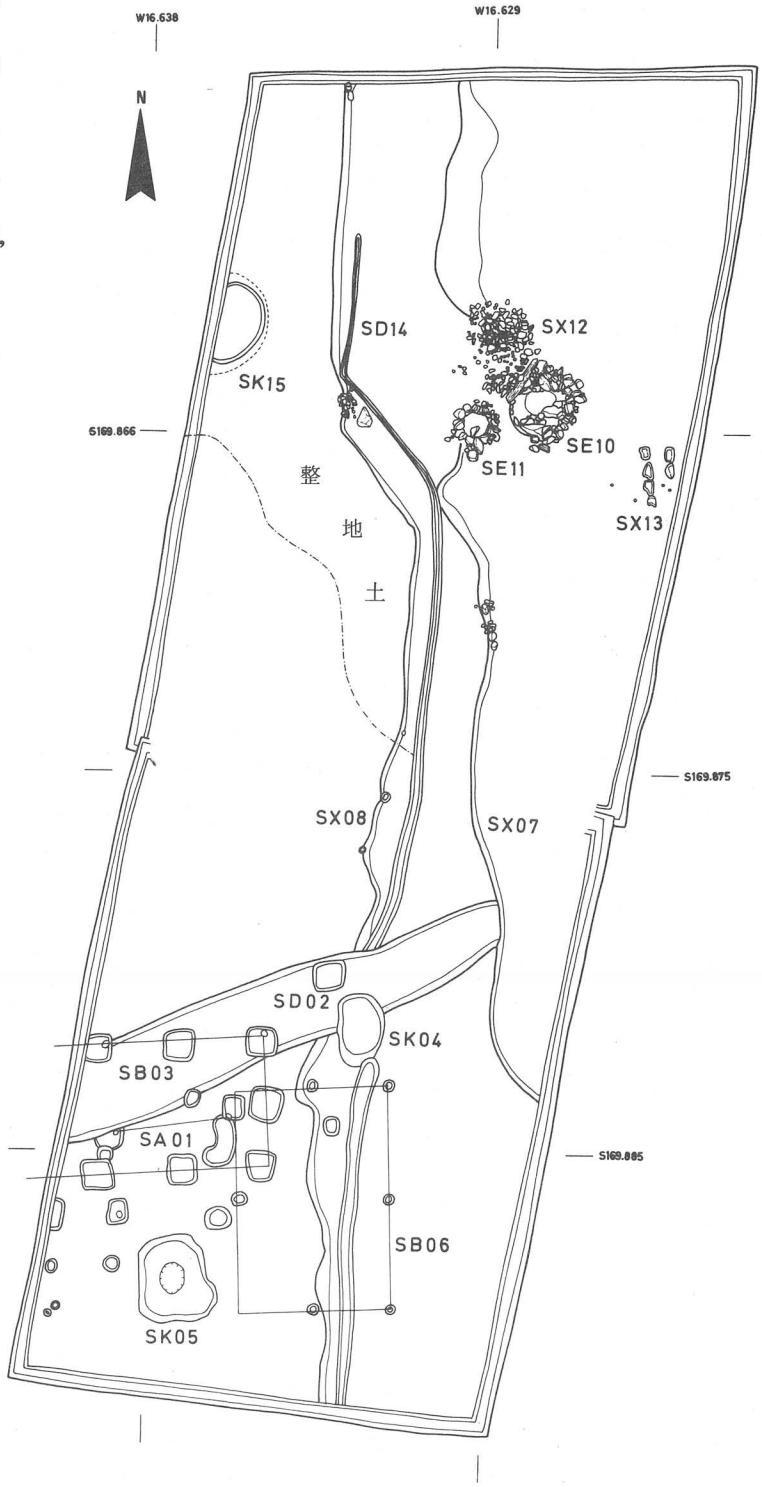


調査地位置図

Ⅱ期に属する斜行大溝ＳＤ02は，幅2.4ｍ，深さ0.9ｍの断面Ｕ字形の素掘り溝である。埋土は３層に分かれるが，各層より７世紀第Ⅰ四半期を中心とする時期の遺物が多量に出土した。

Ⅲ期の遺構には，掘立柱建物ＳＢ03，土坑ＳＫ04・05がある。Ｓ

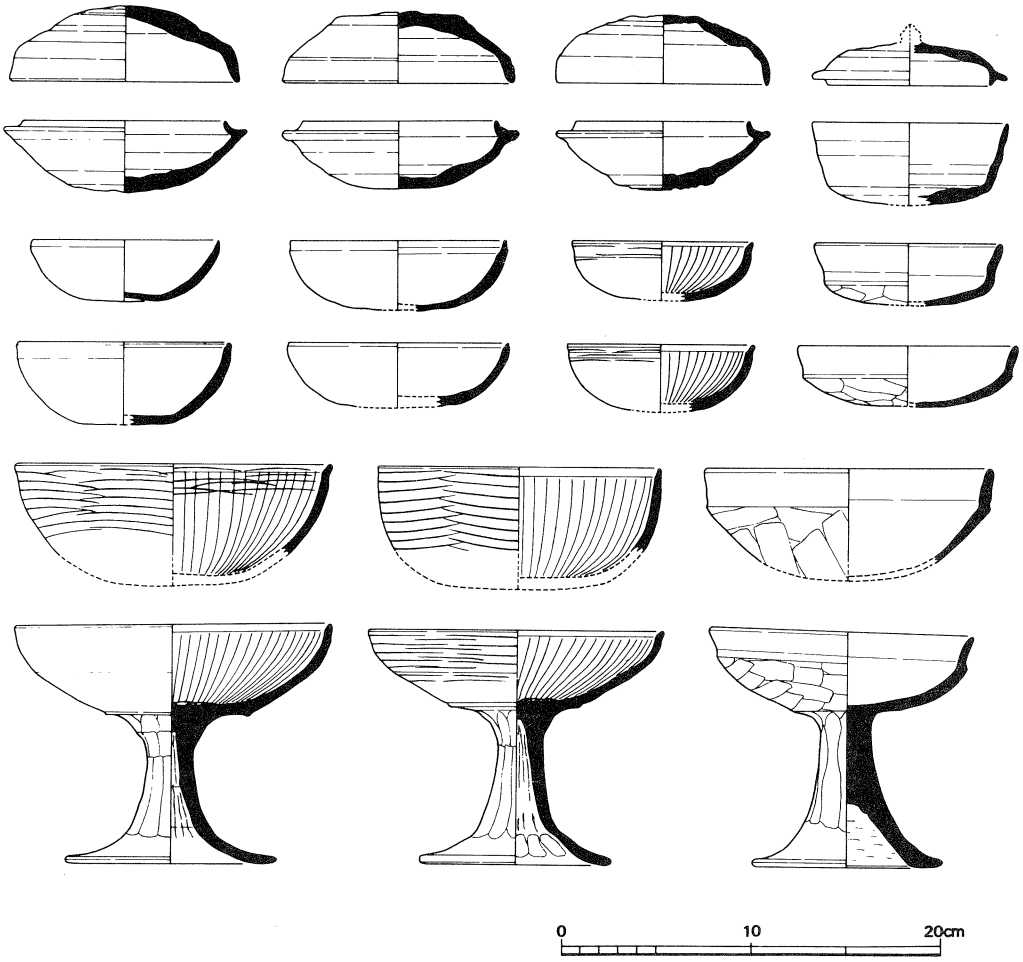
Ｂ03は梁行２間，桁行３間以上の東西棟建物で，西妻は調査区域外に出ている。柱穴は一辺0.8ｍ前後の方形で，いずれも0.5ｍの深さをもつ。柱間は桁行2.1ｍ，梁行1.8ｍ等間である。建物の方位は方眼方位の東で北に2°ほど振れる。北側柱はⅡ期の斜行大溝と重複し，柱穴埋土中には川原寺創建瓦が含まれている。ＳＫ04は深さ0.7ｍの長円形土坑で，底面上に木片が3㎝の厚さで堆積していた。この土坑は斜行大溝と重複するが，斜行大溝よりも新しく，埋土に大形の瓦片を含む。ＳＫ05は一辺2.3ｍの隅丸方形の土坑である。底面から土師器長甕が押しつぶされた状態で出土したほか，埋土から７世紀後半期の土器



川原寺西南部調査遺構配置図（1：200）

とともに，川原寺所用の重弧文軒平瓦や丸・平瓦が出土した。以上の遺構のほかに，調査区北西に広がる整地がⅢ期に属するものである。整地は南で沼の西岸を埋立てるように行なわれ，北では地山を削平して盛土している。整地土は0.3～0.6 mの厚さで，暗黄褐色の山土と茶褐色土の2層からなる。整地の東端は中世の削平をうけて明確ではないが，SX08以東にも及んでいたことが確認された。整地土からは川原寺創建時の軒丸瓦完形品が出土した。なお，調査区の中央を南北に延びるSX07は，整地地業以降の沼の西岸と考えられる。

Ⅳ期の遺構には，掘立柱建物SB06，石組井戸SE10，SE11，石敷SX12，石組溝SX13，土坑SK15などがある。SB06は直径0.25 m前後の小柱穴からなる掘立柱建物で，桁行2間，梁行2間の南北棟である。柱間は桁行3.0 m，梁行2.1 m等間である。柱穴埋土に瓦器片を含む。このSB06廃絶後に，沼の西岸付近に大改修が行なわれている。すなわちSX07西方では，Ⅲ期の整地層ならびに地山を10～40cm掘り込んで削平面を造成し，SX07東方ではこの削平面と同レベルまで沼を埋立てている。この結果，調査区域内においては沼が消滅し，新たな埋立地に石組井戸や石敷，石組溝などが構築される。SE10は径2 m，深さ1 mのすり鉢形の石組井戸である。最下段に50～60cm大の大形の河原石を据え，その上に人頭大の円礫を掘形に沿って斜めに3～4段積み上げている。現状では積石の多くが底面上にずり落ちているが，崩落した石の中には方形に面を取った大理石や凝灰岩，榛原石がまじる。また積石の間には補強材として瓦や炭化材が使用されているところから，川原寺の焼亡後に廃材の一部を転用して構築された可能性が高い。井戸の埋土から出土した瓦器は，白石太一郎氏編年のⅡ－2型式に相当し，12世紀後半代に位置付けられるものである。SE11はSE10の西に隣接して設けられた内径0.7 m，深さ1.2 mの円形の石組井戸である。径20～30cm大の円礫を垂直に6～7段積み上げて構築している。遺物の出土がなく時期は不明であるが，SE11の構築に伴ってSE10の西壁の一部が破壊されているところから，SE10→SE11という先後関係が認められる。これらの石組井戸の北には，小礫を雑然と敷いた石敷SX12が存在する。このSX12とSE10の接する部分には，小礫が井戸へ落下するのを防ぐために



SD 02 出土土器実測図

丸太材が置かれておりSX12がSE10に伴う施設であることが判る。石敷中からは瓦器，青磁，白磁とともに，川原寺所用の四重弧文軒平瓦や平安前期の均整唐草文軒平瓦が出土した。SX13はSE10の南東2 mで検出した石組溝と考えられる遺構で，長さ1.6 mを検出した。石組井戸に関連する排水施設の可能性があるが，南北に接続する溝状遺構は検出できなかった。土坑SK15は調査区北西の整地土上面において検出した。この土坑の西半部は調査区域外にあるが，径約2 mの円形土坑になるものと考えられる。深さは2.1 mに達し，壁は底面から内側に湾曲するように立ち上がる。埋土は人為的に埋戻した状態を示しており，井戸枠を抜きとって一気に埋めた井戸跡の可能性がある。埋土から青磁椀が出土している。Ⅳ期の遺構にはこのほかに，SX08に沿って走る南北

細溝ＳＤ14，調査区西半の地山上面で検出した多くの斜行細溝がある。

今回の調査によって，川原寺主要伽藍西方の寺域の様子が一部明らかになった。以下では昭和32年以来の川原寺発掘調査成果に照らして，今回検出した遺構の性格を簡単にまとめておきたい。

今回の調査地は，川原寺西方に位置する三角形の丘陵の東南裾にあたり，調査区西半では地表下0.4 *m*で花崗岩霏爛土の地山が現れ，安定した地盤を形成している。この地山上から検出されたⅠ期の東西塀やⅡ期の斜行大溝は，川原宮造営以前の遺構である。溝の出土遺物には７世紀第Ⅰ四半期に比定される須恵器・土師器やフイゴ羽口，ルツボ，鉄滓等があり，周辺の丘陵裾部に川原宮造営以前の集落，工房が営まれたことを示している。これに対して調査区の東半からは沼の西岸が検出された。この沼の上限は必ずしも明確ではないが，斜行大溝ＳＤ02を沼への導水路とみると，７世紀第Ⅰ四半期には既に沼が成立していたことになり，川原寺伽藍敷地の下層に広がる沼との関連が新たな問題となる。沼の下限に関しては，沼上に構築された第Ⅳ期の石組井戸，石敷等の年代から，遅くとも12世紀後半には沼が消滅したようである。このように川原寺の存続期間中に，寺域内の一部に沼が存在した事実を得たことは新しい知見であった。次に第Ⅲ期の遺構であるが，これらの遺構から出土する瓦が川原寺創建瓦に限定されることから，川原寺創建以降の遺構と考えられる。特に掘立柱建物ＳＢ03は川原寺の付属屋と考えられる建物である。調査区北西部にみられた整地も同様に付属屋建設のためになされた基礎地業と考えられ，寺域西方に川原寺の寺院経済を支える諸施設が存在することが明らかになった。最後に第Ⅳ期の遺構であるが，石組井戸ＳＥ10の構築材の一部には，川原寺焼失時の廃材と考えられる部材が転用されていた。この井戸の埋土から出土した瓦器は，12世紀後半代に位置付けられるものであり，『玉葉』に記された建久二年（1191）川原寺焼失の記事との関連が注目される。

以上のように，今回の調査によって寺域の西方地域が７世紀以降，川原寺の変遷と密接な関係をもちつつ展開した地域であることが明らかになった。川原寺主要伽藍周辺部の今後の調査が期待される。

飛鳥・藤原宮発掘調査概報 10

昭和55年4月30日発行　編集：奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部